地質学雑誌　第113巻　第9号（通巻1344号）付録　昭和27年6月10日第三種郵便物認可　平成19年9月15日発行（毎月1回15日発行）

日本地質学会 News

Vol.10 No.9 September 2007

出 版 物 在 庫 案 内

ご希望の方は代金を添えて本会事務局宛お申込みください．なお，２冊以上のお申込みにつきましては送料をお問い合わせください．
現金書留または郵便振替　00140－8－28067
40号以前の論集については，一部在庫がございます．院生・学生４割引，正会員２割引で販売しております．ご希望の方は学会事務局までお問い合わせ下さい．No. 40以降の論集：院生・学生のみ２割引

地 質 学 論 集

第 40 号　中央構造線のネオテクトニクス―その意義と問題点―．岡田篤正ほか編，250pp., 1992年12月刊，会員頒価3,200円，〒340円
第 42 号　西南日本の地殻形成と改変．小松正幸ほか編，357pp., 1993年４月刊，会員頒価3,100円，〒340円
第 43 号　浅部マグマ溜りとその周辺現象の地球科学．村岡洋文ほか編，177pp., 1994年４月刊，会員頒価2,000円，〒340円
第 44 号　島弧火山岩の時空変遷．周藤賢治ほか編，335pp., 1995年11月刊，会員頒価2,800円，〒340円
第 45 号　~~シーケンス層序学―新しい地層観を目指して．斎藤文紀ほか編，249pp., 1995年８月刊，会員頒価2,500円，〒340円~~（売り切れました）
第 46 号　火山活動のモデル化．佐藤博明ほか編，162pp., 1996年９月刊，会員頒価 1,900円，〒290円
第 47 号　日高地殻―マントル系のマグマ活動．荒井章司ほか編，323pp., 1997年４月刊，会員頒価3,000円，〒340円
第 48 号　Cretaceous Environmental Change in East and South Asia （IGCP350） Contributions from Japan―　岡田博有ほか編，188pp.，1997年６月刊，会員頒価 2,100円，〒340円
第 49 号　21世紀を担う地質学．新妻信明ほか編，232pp.，1998年３月刊，会員頒価 2,500円，〒340円
第 50 号　構造地質　特別号―21世紀の構造地質学にむけて―．狩野謙一ほか編，263pp.，1998年７月刊，会員頒価2,500円，〒340円
第 51 号　地震と地盤災害―1995年兵庫県南部地震の教訓―．岡田博有ほか編，162pp.，1998年３月刊，会員頒価3,000円，〒340円
第 52 号　オフィオライトと付加体テクトニクス．宮下純夫ほか編，316pp.，カラー 10pp.，1999年９月刊，会員頒価3,000円，〒340円
第 53 号　本州弧下部地殻と珪長質マグマの生成・活動システム．加々美寛雄ほか編，401pp.，1999年11月刊，会員頒価3,900円，〒450円．
第 54 号　タフォノミーと堆積過程―化石層からの情報解読―小笠原憲四郎ほか編，197pp.，1999年12月刊，会員頒価2,900円，〒340円．
第 55 号　~~ジュラ紀付加体の起源と形成過程．木村克己ほか編，221pp.，2000年１月刊，会員頒価2,800円，〒340円．~~（売り切れました）
第 56 号　古領家帯と黒瀬川帯の構成要素と改変過程．高木秀雄ほか編，253pp., 2000年３月刊，会員頒価2,900円，〒340円．
第 57 号　砕屑岩組成と堆積・造構環境．公文富士夫ほか編，240pp., 2000年９月刊，会員頒価2,800円，〒340円．
第 58 号　地震イベント堆積物―深海底から陸上までのコネクション―藤原　治ほか編，169pp., 2004年12月刊，会員頒価2,900円，〒340円．
第 59 号　沖積層研究の新展開　井内美郎ほか編，212pp.，2006年５月刊，会員頒価2,400円，〒340円．

リーフレットシリーズ
大地の動きを知ろう―地震・活断層・地震災害―　1995年４月発行　会員価格200円（非会員300円）
大地のいたみを感じよう―地質汚染Geo－Pollutions 1997年２月発行　会員価格 200円（非会員300円）
大地をめぐる水―水環境と地質環境―　2001年５月発行　会員価格300円（非会員400円）
国立公園地質リーフレットたんけんシリーズ
箱根火山たんけんマップ―今、生きている火山　2007年５月発行　会員価格300円

国立公園地質リーフレットシリーズ
１．箱根火山　2007年７月発行　会員価格1,000円

下敷き：「干渉色図表」・「偏光顕微鏡による鉱物鑑定表」（英語版）１枚200円（非会員300円）

講演要旨集ほか
第114年学術大会講演要旨（2007年札幌）　会員頒価4,000円，〒500円
第114年見学旅行案内書（2007年札幌）　会員頒価2,400円，〒500円
※このほか，大会講演要旨は，2002年新潟，2003年静岡，2004年千葉，2006年高知．見学旅行案内書は，2003年静岡，2004年千葉，2005年京都に残部があります．

フィールドノート：学会オリジナル．12×19cm．ハードカバー．レインガード使用　会員頒価１冊500円．

日本地質学会*News*

Vol.10 No.9 September 2007

The Geological Society of Japan *News*
日本地質学会/〒101－0032　東京都千代田区岩本町２－８－15
井桁ビル　６Ｆ
編集委員長　倉本真一
TEL　03－5823－1150　FAX　03－5823－1156
main@geosociety.jp（庶務一般）
journal@geosociety.jp（編集）
http://www.geosociety.jp

Contents

公示　日本地質学会2008年度
代議員および役員選挙について ……2
選挙実施要領/改選となる役員および代議員名簿/継続任期の役員および代議員名簿/日本地質学会選挙細則/日本地質学会選挙内規/各立候補届け

案内 ……6
第53回日本水環境学会セミナー

公募 ……6
同志社大学工学部 環境システム学科専任教員公募

各賞・助成 ……6
平成20年度笹川科学研究助成募集/第10回大学婦人協会守田科学研究奨励賞受賞候補者募集/日産科学賞推薦者募集

CALENDAR ……7

平　朝彦　前会長　日本学士院賞受賞（倉本真一ほか） ……8

紹介 ……9
日本の石の文化　島津光夫著（徳永重元）

学協会・研究会報告 ……10
ILP Conference “New Frontiers in Integrated Solid Earth Sciences” 報告（金尾政紀・在田一則）

Island Arc日本語要旨 Vol.16-3 ……12
特集：Geology and geophysics of the Philippine Sea and adjacent areas in the Pacific Ocean/通常論文

院生コーナー ……15
東北大グループ，有機地球化学会へ行く（高橋　聡・福田良彦）

学会記事 ……18
2007年度第２回理事会議事録/2007年度第３回理事会（臨時）議事録

事務局営業カレンダー

■ お休みです

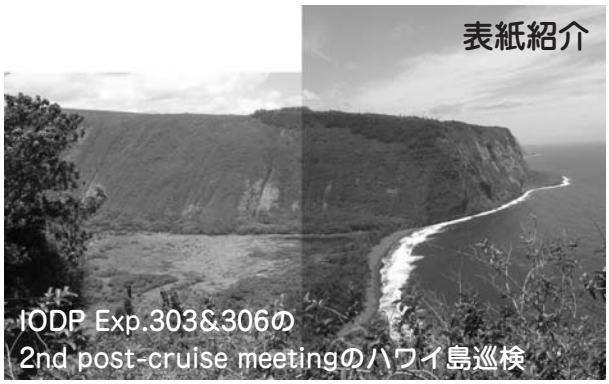
10月/October

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

11月/November

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

planetearth®
Earth Sciences for Society
2007 – 2009

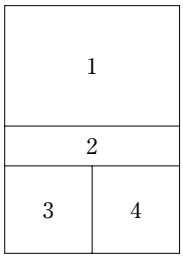


Field excursion at Island of Hawaii in 2nd post-cruise meeting of the IODP Exp.303 & 306

川村喜一郎（(財)深田地質研究所）※写真提供
川村紀子（産業技術総合研究所）
Correspondent author：Kiichiro Kawamura, kichiro@fgi.or.jp,

2007年５月12日にハワイ島ヒロからキラウエア，Chain of Craters Roadを巡る巡検が行われた．巡検のホストは，ハワイ大学Roy H. Wilkens博士で，日本からは川村喜一郎（深田地質研究所），川村紀子（産業技術総合研究所）が参加した．ワイピオ・ルックアウトは，巡検前日にレンタカーで行った．ヒロから，レンタカーで１時間で行ける．

写真で見られるように，ハワイ島は，マグマの噴出によって山体が成長している一方，ワイピオ・ルックアウトのように，浸食，崩壊が進行しているところもある．



（表紙写真）
写真１　ハワイ島キラウエア，プウオオベントの溶岩
写真２　プウオオベント周辺ナパウトレイルで見られるピットクレーター
写真３　プウオオベント周辺ナパウトレイルで見られる溶岩樹
写真４　Chain of Craters Roadで見られる溶岩流

（文中写真）
タイトルバック　ワイピオ・ルックアウト
写真右下　国道を埋めるプウオオベントの溶岩
写真左下　ハワイ島のビールVolcano Red Ale

広告一部取扱：株式会社廣業社
〒104－0061 東京都中央区銀座8－2－9　電話 03－3571－0997　　印刷・製本：日本印刷株式会社

公示　日本地質学会2008年度代議員および役員選挙について

日本地質学会会則ならびに運営細則・選挙細則に基づいて，代議員および役員選挙を実施いたします．選挙細則および選挙内規を掲載するとともに，今回の選挙の要点を以下に記します．

＜会長・副会長・監事および代議員選挙＞

1．今回選挙するのは，会長１名，副会長２名，監事１名，代議員100名（全国区50名・地方区50名）です．選挙権および被選挙権は日本地質学会正会員にあります．今回改選される役員は，2006年度の選挙で選出された方々です．

2．役員の任期はいずれも２年で，2008年４月（総会）から2010年３月（総会）までです．

3．代議員は，最高議決機関である総会に出席し，議決権を行使できます．また，理事に立候補することができます．

＜理事選挙＞

4．理事は，代議員の互選により選出されます．今回当選された代議員（全国区・地方区）の中から立候補していただき，７名を選出します．ただし，理事に選出された方は代議員を兼務できません．

＜評議員選挙＞

5．評議員は，全国区の代議員に当選された方の中から選出されます．全国区の代議員当選者（理事当選者を除く）から代議員選挙の得票順および所属別定員充足数と支部所属者を考慮して，20名を選出します．評議員は，代議員を兼務します．

具体的な選挙については下記のとおり実施いたします．立候補ならびに推薦される方はお間違いのないよう，期日までに立候補届けをご提出下さい．

2007年９月10日
日本地質学会選挙管理委員会
委員長　加藤　潔
委　員　有井聡美　駒田希充
佐脇貴幸　西村瑞恵

2008年度会長・副会長・監事および代議員選挙実施要領

1．選挙者および被選挙者，立候補の届出について

選挙者および被選挙者は日本地質学会正会員に限ります．立候補届けは所定の書式（別途掲載）により期日までに届くよう，日本地質学会選挙管理委員会に郵送，E-mail送信または持参してください．E-mail送信による届け出については８項を参照して下さい．

日本地質学会選挙管理委員会
〒101-0032　東京都千代田区岩本町2-8-15　井桁ビル
E-mail　選挙<main@geosociety.jp>

2．選出数および任期

会　長　１名
副会長　２名
監　事　１名
代議員　100名　（全国区50名，地方区50名）

1）当選者の決定に際しては，代議員地方区は得票順が，全国区は得票順とともに所属別枠による最低充足数が考慮されます．
2）全国区，地方区いずれの代議員当選者も理事に立候補できます．
3）全国区で当選した代議員のうち理事にならない代議員は，評議員に選出される可能性があります．

任　期　上記いずれも２年（2008年４月～2010年３月（総会～総会まで））

3．立候補について

会長，副会長，監事　他薦による立候補
代議員　自薦および他薦による立候補

4．地方区の区分けは現在ある支部の区分に準じます．地方区で立候補する方は，居住する県別により該当する地方区で立候補してください．ただし，選挙者は所属支部に関わりなく，全ての地方区に投票できます．

5．地方区選出数は2007年８月の支部会員数により50名を比例配分しています．

北海道地方区	３名	（北海道）
東北地方区	４名	（青森，秋田，岩手，山形，宮城，福島）
関東地方区	19名	（茨城，栃木，群馬，埼玉，千葉，東京，神奈川）
中部地方区	９名	（新潟，長野，山梨，静岡，富山，石川，福井，岐阜，愛知）
近畿地方区	６名	（滋賀，奈良，京都，三重，大阪，和歌山，兵庫）
四国地方区	２名	（徳島，香川，高知，愛媛）
西日本地方区	７名	（岡山，広島，鳥取，島根，山口，福岡，佐賀，熊本，長崎，大分，宮崎，鹿児島，沖縄）

6．選挙日程

立候補受付期間
10月１日（月）～10月31日（水）
（郵送，E-mail送信，持参，いずれも必着厳守）
選挙広報・投票用紙の発送　11月10日前後に郵送

投票期間　　11月15日（木）～12月15日（土）
開票日時　　12月17日（月），9時より学会事務所にて
選挙結果（中間）報告　　開票後速やかに，ホームページ，ニュース誌上にて報告
理事および評議員の選出　　1月初旬開始～1月30日までに決定，報告

7．立候補の状況および選挙結果については，メルマガやホームページで随時お知らせいたします．

8．その他

1）立候補届けは所定の書式に記入して提出して下さい．

2）E-mail送信の場合には，ホームページから書式をダウンロードし，添付書類として送付願います．Subjectは「○○○立候補届け」（○○○は役職名）として下さい．

自薦の場合＞　立候補者本人のメールアドレスから送信，提出して下さい．

他薦の場合＞　基本的には候補者本人のメールアドレスから送信，提出して下さい．但し，やむをえず推薦者のアドレスから送信する場合には必ず候補者のメールアドレスを明記してください．その場合には承諾書（自署・捺印）に代えて，委員会がE-mailにて本人に承諾を確認します．期日までに立候補者本人の承諾が確認できない場合は無効です．

3）立候補届け受領書の発行

選挙管理委員会では，立候補届けを受け取りましたら，E-mailまたは郵便はがきで折り返し受領書を発行します．自薦の場合には候補者に，他薦の場合には候補者と推薦者（代表者）の両方にお出しいたします．

以下に，改選者および非改選者氏名の一覧を掲載いたします．

1．改選となる役員および代議員名簿

会　長　木村　　学
副会長　伊藤谷生・佃　栄吉
監　事　佐藤尚弘
理　事　Wallis Simon・狩野謙一・公文富士夫・倉本真一・中山俊雄・久田健一郎・向山　栄
評議員（代議員兼任）
会田信行・浅野俊雄・足立勝治・安藤寿男・石垣忍・石渡　明・井内美郎・井龍康文・岡　孝雄・小山内康人・加藤　進・紺谷吉弘・酒井治孝・徐　垣・新井田清信・針金由美子・松岡　篤・松田博貴・丸山茂徳・渡辺真人
代議員
＜全国区＞　佐々木和彦・吉川敏之・片山　肇・芝川明義・天野敦子・小嶋　智・鳥海光弘・吉川周作・榊原正幸・多田隆治・近藤康生・徳山英一・大藤　茂・豊島剛志・八尾　昭・仲谷英夫・早坂康隆・竹下　徹・三次徳二・岡田　誠・西　弘嗣・村山雅史・長谷部徳子・亀井淳志・山口飛鳥・奥澤康一
＜地方区＞　青野道夫・池田保夫・稲場土誌典・入月俊明・上野勝美・浦辺徹郎・大谷具幸・大和田正明・奥平敬元・小畑正明・加々島慎一・神谷英利・川野良信・川村信人・木村克己・楠田　隆・國井絢子・齊藤靖二・佐野　栄・島本昌憲・下山正一・菖蒲幸男・清水惠助・鈴木宇耕・鈴木紀毅・平　朝彦・田中秀実・竹之内耕・中条武司・永田秀尚・角替敏昭・手塚裕樹・中井睦美・奈良正和・延原尊美・長谷川卓・平島崇男・藤縄明彦・松末和之・松田義章・松原典孝・宮本隆実・森田康裕・山田泰広・山本博文・吉田孝紀・吉岡　正

2．継続任期（2009年総会まで）の役員および代議員名簿

理　事　天野一男・上砂正一・斎藤　眞・藤本光一郎・宮下純夫・矢島道子・渡部芳夫
評議員（代議員兼任）
大友幸子・保柳康一・脇田浩二・三宅康幸・高木秀雄・磯﨑行雄・新妻信明・永広昌之・柴　正博・沢田順弘・北里　洋・山路　敦・川端清司・卜部厚志・阿部国広・荒戸裕之・堀　利栄・松本俊幸・山根　誠・中川光弘
代議員
＜全国区＞　荒井章司・楡井　久・伊藤　慎・清水以知子・松本　良・藤林紀枝・三田村宗樹・狩野彰宏・里口保文・星　博幸・竹内　誠・清川昌一・福冨幹男・坂井　卓・柏木健司・中西健史・町山栄章・小荒井衛・石井和彦・青木隆弘・田村嘉之・笠原　豊・本山功・於保幸正
＜地方区＞　田近　淳・岡村　聡・前田仁一郎・鎌田耕太郎・川村寿郎・西川 治・坂口有人・七山　太・笠間友博・山本高司・外田智千・芦　寿一郎・荒井晃作・安藤　伸・緒方信一・小澤一仁・利光誠一・府川宗雄・森田澄人・香東卓郎・納谷友規・横山芳春・植村和彦・北村晃寿・小井土由光・椚座圭太郎・竹内　章・栗田裕司・鈴木和博・原山　智・東田和弘・前川寛和・升本眞二・此松昌彦・田上高広・田中里志・林田明・村田明広・寺林　優・金折裕司・尾上哲治・三宅誠・柚原雅樹・鈴木清一・西園幸久・中村眞人・門藤正幸

日本地質学会選挙細則

（目的）
第1条　日本地質学会会則第48条にもとづいて本細則を定める．
（規則の変更）
第2条　この規則の変更は，評議員会に諮り，理事会の議決によって行う．その結果を総会に報告し，承認を求める．
（選挙管理委員会）
第3条　役員（会長，副会長，理事および監事），代議員および評議員の選出作業は，選挙管理委員会が行う．
2　選挙管理委員会規定は別途定める．
（役員，代議員および評議員選挙）
第4条　理事（除く会長および副会長）および代議員は毎年，定数の半数を改選する．
2　会長・副会長，監事（1名，もう1名は会長が専門家を委嘱する）の選挙は正会員による無記名投票とし，選挙管理委員会は結果を理事会に報告しなければならない．
3　会長・副会長及び監事候補者は正会員とし，正会員2名以上の連署による推薦を受け，別途定める参考事項（必要事項と立候補にあたっての意見等）を記した立候補届けを所定の期日までに選挙管理委員会に届けなければならない．
4　代議員選挙は正会員による無記名投票とし，毎年定数の半数（全国区50名および地方区（区分は支部に準ずる）50名）を選出する．選挙管理委員会は結果を総会に報告しなければならない．なお，全国区の選出にあたっては所属別定員充足数を考慮する．
5　代議員候補者は正会員とし，自薦および他薦（本人の承諾書必要）とする．立候補者は別途定める参考事項を記した立候補届け

を，所定の期日までに選挙管理委員会に届けなければならない．

6　理事（除く会長および副会長）の選挙は，全代議員による無記名投票とし，毎年定数の半数を選出する．被選挙者はその年度に選出された代議員とし，候補者は意見等の参考事項を記した文書を，所定の期日までに選挙管理委員会に届けなければならない．理事に選出された者は代議員から除くものとする．

7　評議員は毎年，定数の半数を選出する．評議員の選出は全国区代議員の選挙結果にもとづいて20名を決定する．決定にあたっては所属別定員充足数を考慮する．

8　評議員選挙の当選者の決定の際には，それぞれの支部所属者が最低１名含まれるように，選出順位の調整を行うこととする．

9　立候補者数が定数に満たない場合には，無投票当選とする．ただし，代議員選挙において全国区で立候補者数が定数を越えない場合には評議員選出のための投票をおこなうものとする．

10　投票方法，当選者の決定等については別途定める．

11　役員，代議員および評議員が任期中に何らかの理由で欠員となった際の補充方法は，以下のように取り扱う．

会　長　副会長の年長者が代行する．
副会長　理事の年長者が代行する．
監　事　会長が委嘱する．
理　事　理事選挙の補欠者をもって充てる．
代議員　会長が評議員会に委嘱する．
評議員　補充は行わない．

12　全国区代議員の選出および評議員決定の際の最低所属別定員充足数

所属	備　　考	最低充足数	
		全国区代議員	評議員
大学		6	3
小中高	教育センター等を含む	6	3
官公庁等	公団，行政法人，公立私立博物館等を含む	6	3
会社		6	3
大学院	大学院生	2	1

（選挙日程）

第５条　会長・副会長及び監事,代議員の選挙は次の日程で行わなければならない．ただし，締切り日が休日と重なる場合は，翌日あるいは翌々日とする．

(1) 選挙公示：毎年９月10日
(2) 立候補受付：毎年10月１日～10月31日
(3) 投票期間：毎年11月15日～12月15日
(4) 開票ならびに選挙結果報告：毎年12月16日～12月22日

2　理事の選挙および評議員の選出は，代議員選挙終了後，毎年１月30日までに完了することとする．

（細則施行）

第６条　この選挙細則は，2003年９月19日から施行する．

付則

03年12月13日改正

日本地質学会選挙内規

（選挙の実施）

1　選挙管理委員会において実施する選挙は，原則として郵便による通信投票とする．なお，この方法によらない場合には，あらかじめそのことを広報し，有権者に周知する．

2　立候補者は所定の立候補届けを，定められた期間内に選挙管理委員会に届ける．

3　選挙管理委員会は選挙を実施するにあたり，投票の参考となるよう，「候補者名簿」を作成し，投票用紙とともに有権者に配布する．また，開票日もあらかじめ知らせる．

4　「立候補者届」および「候補者名簿」には，立候補する役職に応じて定めた下記の事項を記載する．アンダーラインの項目は必須記載事項とし（所属機関がない場合は「なし」），それ以外は自由記載項目とする．

1）会長・副会長　　氏名，所属機関，推薦者氏名（正会員２名以上），候補者推薦承諾書，所属専門部会，立候補者の抱負または推薦文（100文字以内）

2）監事　　氏名，所属機関，推薦者氏名（正会員２名以上），候補者推薦承諾書，所属専門部会，立候補者の抱負または推薦文（100文字以内）

3）代議員　　氏名，所属機関，所属機関の所在都道府県名，（「所属機関なし」の方は自宅住所の都道府県名），立候補の区分（全国区・地方区）・所属別区分（選挙細則第４条12項に定めたもの），所属専門部会，立候補者の抱負または推薦文（推薦者名）（100文字以内）

4）理事　氏名，所属機関，立候補者の抱負または推薦文（推薦者名）（100文字以内）

5　正会員は，あらかじめ選挙管理委員会に申し出て開票に立ち会うことができる．

（当選者の決定）

6　各選挙とも選挙細則に基づいて得票順位を確認し，当選者を決定する．

7　当選最下位者が複数（同点）の場合は，抽選により当選者を決定する．抽選は選挙管理委員長の責任により，選挙管理委員が候補者の代理となって，候補者名簿の順にくじびきをおこなう．

8　理事選挙の当選者決定に際しては，当選最下位者に続く補欠５名を得票順に決定する．

9　選挙管理委員会は，開票結果を速やかに理事会等に報告するとともに候補者に通知する．また，学会ホームページやNews誌に速やかに掲載し，会員にも報告する．

（その他）

10　代議員の定数と補充について

代議員全国区の定数50名から理事７名を選出した場合の欠員は，補充の対象とはしない．また，この理由以外で欠員が生じた場合でも，会則に定めた最低定数170名（１期85名）を割らない場合は補充しない．

11　代議員地方区の定数と補充について

1）各地方区の定数は，選挙公示１ヶ月前の各支部の正会員数に応じて比例配分する．

2）地方区が定数不足でも，全国区と合わせて会則に定めた最低定数170名（1期85名）に達している場合は補充しない．

12　本内規の変更は，理事会が決定する．

◎ どちらの書式も紙はA4判（タテ）の大きさでご提出下さい.

会長・副会長・監事立候補届け

*印の項目は必ず記入してください.

*立候補役職及び任期（いずれかに○印）		会長	任期2年		監事	任期2年	
		副会長	任期2年				
*立候補者氏名	e-mail						
*所属機関名							
*推薦者氏名（正会員2名以上）							
*立候補者推薦承諾書	日本地質学会（　　）に立候補することを承諾いたします.（氏名）						㊞
所属専門部会							
候補者の抱負または推薦文(100字以内)							
						選挙管理委員会受取日　10月　　日	

代議員立候補届け

*印の項目は必ず記入してください.+印は他薦の場合のみ記入

*立候補の区分（地方区の場合はいずれかを○で囲む）		全国区	
		地方区	(北海道　東北　関東　中部　近畿　四国　西日本)
*立候補者氏名	e-mail		
+他薦の場合:　推薦者氏名			
+他薦の場合:推薦承諾書	日本地質学会（　　）に立候補することを承諾いたします.（氏名）		㊞
*所属機関名（ない場合はなしとしてください）			
*所属機関所在地または住所の県別名			
*所属別区分（いずれかを○で囲む）	大学　小中高　官公庁　会社　大学院生　とくに区別なし		
所属専門部会			
立候補者の抱負または推薦文(100字以内).推薦文の場合は推薦人名を文章の最後につけてください.			
			選挙管理委員会受取日　10月　　日

ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会からのご案内を掲載します．

第53回日本水環境学会セミナー「水生生物保全に係る環境基準の設定とその動向」

期日：2007年11月９日（金）９：30
場所：自動車会館大会議室（東京都千代田区九段南4-8-13／Tel. 03-3264-4719）
（http://www.jidosya-kaikan.com/index.html）
JR総武線，地下鉄有楽町線・南北線・都営新宿線「市ヶ谷駅」徒歩２分

参加費：会　員/7,000円　非会員/14,000円
学生会員/3,000円
定　員：150名
申込方法：
FAX，E-mail，またはハガキに①参加者氏名，②会員･非会員の別，③会員の場合は会員番号，④連絡先（所属団体名，住所および電話・FAX番号）をご記入の上，下記宛てお申し込み下さい，また，**参加費を10月31日までにお振り込み下さい．**入金を確認後，参加証（ハガキ）をお送りいたします．

プログラム
10：00－11：00
水生生物と人の生活との関わり
信州大学山岳科学総合研究所　花里孝幸
11：10－12：10
化学物質の水生生物への影響と評価手法
淑徳大学国際コニュミケーション学部
若林明子
13：30－14：30
水生生物の保全に係る環境基準の設定と類型指定
環境省水・大気環境局水環境課
14：40－16：10
水生生物の保全に係る環境基準と排水基準の課題と展望（質疑応答含む）
埼玉県環境科学国際センター　須藤隆一

申し込み・問い合わせ先：
（社）日本水環境学会　セミナー係
（E-mail：yamamoto@jswe.or.jp）
〒135-0006　東京都江東区常盤2-9-7
グリーンプラザ深川常盤201号
Tel．03-3632-5351　Fax．03-3632-5352

公募

教官公募等の求人ニュース原稿につきましては，採用結果をお知らせいただけますようお願い致します．

応募

同志社大学工学部環境システム学科専任教員公募

募集人員：教授または准教授（選考時に職歴や業績を参考に検討します）１名
所属：同志社大学理工学部環境システム学科
専門分野：地域環境学（都市環境，気候学，環境変遷学，地理情報システムや遠隔探査などを含む）．特に，グローバルな変動に対し，特定地域の環境についての教育と研究を行う．
担当予定科目：地域環境学，都市環境学，環境システム基礎実験，環境システム応用実験，卒業論文など．学部初年度生を対象とした地球環境科学，プログラミング，物理学などの専門基礎科目，全学共通教養教育科目を分担していただくことがあります．
応募資格：博士の学位を有し，専門分野において優れた研究業績があり，学部の教育に熱意を持つ，着任時49歳までの方．

着任時期：2008年４月１日
提出書類：
履歴書（写真添付）/研究業績一覧（著書，学術論文，国際会議論文，その他）/主要論文の別刷り（10編以内）/着任後の教育と研究に関わる抱負（Ａ４用紙２枚程度）/推薦書，または本人について所見を求めることができる方の氏名と連絡先

応募締切：**2007年10月10日（水）必着**

書類送付・問い合わせ先
〒610-0321　京田辺市多々羅都谷1-3
同志社大学工学部環境システム学科
教務主任　林田　明
Tel：0774-65-6680,
E-mail：ahay@mail.doshisha.ac.jp

その他
応募書類は簡易書留とし，「環境システム学科教員応募書類在中」と朱書してください．審査後，応募書類の返却を希望される方は，郵便番号・住所・氏名を記載し，郵便切手を貼った返信用封筒を同封してください．

各賞・研究助成

日本地質学会に寄せられた候補者の推薦依頼をご案内いたします．推薦ご希望の方は締切日半月前までに，理事会までお申し込み下さい．

平成20年度笹川科学研究助成募集《学術研究部門》

１　趣旨
21世紀は大きな価値基準の転換と，そのもとになる哲学の転換期であり，直面する諸課題を克服し今後の展望を拓いていくために，科学・技術は重要な鍵を握っています．
科学・技術において重視されるべきものは，新たなものを生み出し活用する「新しい知の創造」に向けなければなりません．
それには，これまで必ずしも十分な活躍の機会を与えられなかった多様な人材が能力を発揮できるようにするため，優れているが他からの研究助成が受け難い研究を掘り起こし，新規性，独創性または萌芽性をもち，発想や着想に意外性をもった研究に視点をあてます．
もって，科学・技術研究の次代を担う人材育成と，その研究を奨励して科学・技術研究の振興を図ることを目的とします．

２　申請区分と研究対象領域
Ａ〔一般科学研究〕
人文・社会科学および自然科学（医学を除く）に関する研究
Ｂ〔海洋・船舶科学研究〕
「海洋学および海洋関連科学」ならびに「船舶および船舶関連科学」の研究を特別に奨励するもので，その成果が海洋・船舶関係に直結する研究（人文・社会科学を含む）

３　募集対象者
Ａ〔一般科学研究〕
平成19年４月１日現在，大学院生あるいは所属機関等で非常勤・期限付き雇用研究者として研究活動に従事する者であって，35歳以下の者
Ｂ〔海洋・船舶科学研究〕
平成19年４月１日現在，大学院生あるいは所属機関等で研究活動に従事する（常勤・非常勤は問わず）者であって，35歳以下の者

４　申請条件
(1) 申請者は，平成19年度の研究完了まで日本所在の大学，研究機関等に籍を置き，在日できる者に限ります．
(2) 申請者は，当該研究について推薦書を必要とします．
(3) 推薦者は，日本に在住する当該研究の実質的指導者とし，助成金の交付が決定した場合は，当該研究の実施内容と経費支出の確認者になることを条件とします．

(4) 他の助成団体から助成を受ける研究と実質的に同じ内容の研究は，対象となりません．
(5) 平成19年度の日本学術振興会特別研究員に採用された者は，対象となりません．
(6) 申請は，１個人１研究計画に限ります．

5　申請書
申請は，所定の書式http://www.jss.or.jp/sasagawa/apply/apply.htmlを使用して下さい．

6　申請受付期間
平成19年10月１日～15日＜必着＞

送付および問い合わせ先：
財団法人日本科学協会笹川科学研究助成係
〒107-0052　東京都港区赤坂１－２－２
日本財団ビル５Ｆ
TEL　03-6229-5365　FAX 03-6229-5369
E-mail：jss@silver.ocn.ne.jp
詳細は，URL：http://www.jss.or.jpをご参照下さい．

第10回大学婦人協会守田科学研究奨励賞受賞候補者募集要項

趣旨：本賞は，化学教育者・故守田純子氏から遺贈された資金をもとにして，自然科学を専門とする女性科学者の研究を奨励し，科学の発展に貢献する人材を育成することを目的として，1998年に設けられたものです．
対象：自然科学分野において，優れた研究成果をあげており，将来，科学の発展に貢献することが期待される40歳未満（応募締切日現在）の女性科学者を対象としています．
授賞件数：年２件以内
賞状及び副賞50万円を贈呈します．
提出書類：１．推薦状，２．履歴書（写真貼付），３．研究業績リスト，４．主要な論文別刷５編以内，それぞれ３部（コピーでも可），５．研究題目とその概要及び今後の展望と抱負を記したもの（Ａ４版２頁以内）
応募締切日：**2007年11月30日（金）（必着）**
書類送付先及び連絡先：
社団法人　大学婦人協会
〒160-0017　東京都新宿区左門町11-6-101
TEL　03-3358-2882　FAX　03-3358-2889
http://www.jauw.org

日産科学賞推薦者募集

候補者対象　生命科学，理学・工学分野において，地球環境に係わる基礎研究で学術の向上発展に大きな貢献をした，わが国の公的研究機関に所属する新進気鋭の研究者
褒賞人員：１名
募集方法：当財団が依頼する学・協会の代表および推薦委員からの推薦によります．
募集締切：**2007年10月15日（月）**
賞の内容：賞状および賞金500万円．
審査選考：平成20年３月頃を予定．

問い合わせ先
日産科学振興財団
〒104-0061　東京都中央区銀座6-16-9
TEL（03）3543-5597
FAX（03）3543-5598
http://www.nissan-zaidan.or.jp/index.php

CALENDAR

2007.10～

地球科学分野に関する研究会，学会，国際会議，などの開催日，会合名，開催学会，開催場所をご案内致します．会員の皆様の情報をお待ちしています．
☆印は，日本地質学会行事．

2007年

10月　October

○第３回国際シンポジウム“東および南アジアの地質学的解剖”（IGCP516）
10月８日（月）～14日（日）
場所：インド・デリー大学
http://staff.aist.go.jp/hara-hide/igcp516

○日本地震学会2007年秋季大会
10月24日（水）～10月26日（金）
場所　仙台国際センター（仙台市）
http://zisin.or.jp/meeting/2007/index.html

11月　November

○第４回“Gondwana to Asia”国際シンポジウム・国際ゴンドワナ研究連合2006年学術大会
11月８日（木）～10日（土）
会場：九州大学・西新プラザ
問い合わせ先：gond-asia@scs.kyushu-u.ac.jp：中野伸彦（九州大学）
http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/earth/2007gond-asia/

○ロンドン地質学会200年記念式典（BICENTENARY of the GEOLOGICAL SOCIETY OF LONDON 1807－2007）
11月12日（月）～13日（火）
会場：The Geological Society of London, Burlington House, Piccadelly, London
巡検：11月９日～11日：the　Isle of Wight.
URL：www/geolsoc.org.uk/bicentenary

○日本火山学会2007年度秋季大会
11月18日（日）
会場　島原市
http://www.sevo.kyushu-u.ac.jp/kazan2007/

○日本第四紀学会50周年記念事業国際シンポジウム
アジア・西太平洋の第四紀－環境変化と人類－
11月19日（月）～22日（木）
場所　産業技術総合研究所共用講堂（茨城県つくば市）
主催　日本第四紀学会，産業技術総合研究所
http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr/index.html

○第５回火山都市国際会議島原大会
11月19日（月）～23日（金）
会場：雲仙岳災害記念館・島原復興アリーナ
http://www.citiesonvolcanoes5.com/jp/

2008年

1月　January

○第３回国際テチスシンポジウム
（Third International Conference on the Geology of the Tethys
１月８日（火）～11日（金）
会場　アスワン，South Valley University
発表要旨締切　2007年11月30日（金）

○第17回環境地質学シンポジウム
１月10日（木）～11日（金）
場所　日本大学文理学部　百周年記念館　国際会議場
主催　地質汚染－医療地質－社会地質学会
発表申し込み期日：2007年10月31日（必着）
http://www.jspmug.org/envgeo_sympo/17th_sympo.html

8月　August

○6th International Conference on Asian Marine Geology
－Asian Waters explored by advanced research of 21st Century－
８月29日（金）～９月１日（月）
場所　高知市
http://ofgs.ori.u-tokyo.ac.jp/ICAMG6/

平　朝彦　前会長　日本学士院賞受賞

平　朝彦　前日本地質学会会長は，平成19年６月11日，天皇皇后両陛下ご臨席のもと，日本学士院賞を受賞されました（http://www.japan-acad.go.jp/japanese/news.htm#shiki）．受賞対象研究は，「プレート沈み込み帯の付加作用による日本列島形成過程の研究」です．この研究は四国の四万十帯研究に端を発し，日本列島形成論へと発展したもので，海洋プレートの沈み込みに伴う付加作用を地質学的手法を用いて，詳細に研究された成果を基礎としています．まさに80～90年代に日本地質学会内でも熱く，時に激しく議論されてきた学問のリーダーが，今回の受賞に値したことは，平氏個人の受賞をお祝いするだけでなく，地質学という学問を社会に再認知してもらったことと受け止め，多くの会員の皆さんとこの喜びを共有したいと思います．受賞理由は日本学士院から公表されている（前出ホームページを参照）ので，そちらをご覧いただきたいが，ここではこの受賞研究のさなかのエピソードや氏の横顔をご紹介したいと思います．

－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－

平　朝彦氏の学士院賞受賞をこころよりお祝い申し上げます．

さて，私と平氏との付き合いは1981年，香川大学に赴任した後に，学生を連れて高知の四万十帯を巡検に出かけた時にはじまる．それまで，北海道にいた私は＜フィールドにはテントに釣り竿＞を常識として出かけていた．学生共々「るんるん気分」で出かけたのである．当時すでに学界で大きな存在となっていた平氏らを表敬訪問すべく，高知大学に挨拶がてら顔を出した．事前に何も打ち合わせていないにも関わらず，平氏には四万十帯の手結，安和メランジュを自ら案内していただき，感動的な巡検となった．以来，私は徳島県の四万十帯を研究することとなり，平氏から多くの教えをいただきながら現在に至っている．

また，1982年，私が初めて訪米する時も平氏は一緒であった．付加体をテーマとした米国地質学会のペンローズ会議，そしてテキサスA＆M大学でのGeodynamics Symposium参加のためである．このペンローズ会議で平氏ら高知大グループの放散虫を駆使した四万十帯の研究が世界を感動させたのである．この際のエピソードを１つ．往路の中継ぎのホノルル空港に早朝到着し，トランジットのために再チェックインした．平氏が「もう大丈夫」というので二人ともロビーで寝てしまった．目が覚めると何やらざわついている．「overbooking!」．長い米国生活の平氏を信頼しきっていた私は固唾をのんで見守った．平氏はちょっと東北なまりの入った流暢な英語で交渉している．私はただ，ボーとしているだけ．結果は通常決着の＄200を超える＄300を得て，かつその１時間程度後の他の航空会社の便を確保，無事にテキサスへたどりついた．なんとも頼もしい限りであった．

その後，四国では，当時愛媛大学におられた鳥海光弘氏や平氏らと共に，四国地学系有志合同釣り大会を開催し，研究や浮き世を忘れて，寝ずに釣りにのめり込んだりした．これが私たちの「ちょっと遅れた」青年時代の原風景である．

平氏は公私共々，良き指導者であり，先輩でもある．今後も学界の重鎮として活躍を続けていただけるものと期待してやまない．

（木村　学）

－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－

平　朝彦さんは，付加作用による日本列島形成過程の解明において多大な貢献をされ，このたび日本学士院賞を受賞された．これらの研究についてはすでに公表されているので，ここでは堆積学的研究について触れたい．今から20年ほど前，平さんが居られた東京大学海洋研究所の研究室には粒度分析装置，大型の循環式水槽があった．粒度分析装置は天秤式ではなく独自に設計された光学式のものであった．大型水槽の方は，八木下晃司氏らと共同で，反砂堆の粒子配列などの実験的研究が多数行われていた．また，それ以前には擬塑性流体の粘度特性の測定と乱泥流の水槽実験など，実験的研究をよくされていた．余談ではあるが，当時ポスドクの徐　垣氏，大学院生の倉本真一氏と私は，平さんに依頼されて大きなアクリル板を切って科学番組撮影用の水槽を手作りしたことを覚えている．水槽は完成してから20年経つが今も学生実習・

アウトリーチに大活躍している．このような実験的研究を含めた堆積学と，大学院生時代に居られた米国を初め数多くの野外調査の経験を土台に，その後の四万十帯，南海トラフ付加プリズム，太古代のテクトニクス，白亜紀黒色頁岩，大陸の成長過程などの研究を次々と進められたものと思われる．平さんとフィールドに行くと，良い露頭，特に堆積岩の露頭の前では嬉々としてペンを走らせられる．露頭のスケッチではなく，当時の地質を復元した三次元の模式図である．これから「ちきゅう」による掘削結果をもとに，どのような絵が描かれるか楽しみである．今後とも地質学の発展のため，引き続きのご指導，ご鞭撻をお願い申し上げ，お祝いの言葉に代えさせていただく．

（芦　寿一郎）

－＊－＊－＊－＊－＊－＊－＊－

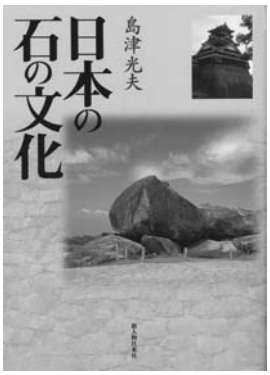
平さんは現在，独立行政法人　海洋研究開発機構の理事を務められ，地球深部探査センター長を兼務されています．地球深部探査船「ちきゅう」の運用の最高責任者としての重責を負っておられますが，同時に日本学術会議の会員や総合科学技術会議委員，科学技術・学術審議会などの委員としてもご活躍されています．また最近では内閣官房総合海洋政策本部参与として，これからの海洋政策などにも多大な貢献が期待されています．様々な役職を引き受けられて，さぞかしお忙しい日々を送られていると思いますが，常に「地球」を見つめる地質学者の目で，時に46億年の歴史を語るがごとく大胆に，かつ本質をつかんだメッセージは野外調査だけでなく，様々な局面でお見受けします．これからもますますのご活躍をお祈りいたします．

（広報担当理事　倉本真一）

紹　介

日本の石の文化

島津光夫　著



新人物往来社　2007年７月発行，Ｂ５版，
238頁，2000円（税別），
ISBN978-4-404-03482-3

石を見るにも色々の視点がある．

本書の著者は通産省地質調査所における岩石・鉱床の調査研究で多くの経験と業績を上げられ其後大学において更に専門的・学際的な視野を拡げておられる．本書はその広い視野に立って遺跡に存在する石を岩石学的立場で捉えるだけでなく，歴史・考古学的な資料をも背景に加えて，多分野にわたって平易にまた詳しく検討・解説したものである．

本書は大別して２章に分けられ，第１章では主として古墳における石を考古学的にまた史的に全国規模で詳しく記述している．ついで国内の著名な庭園における石の種類と由来，城の石垣の石材・石積などに岩石学的考察を加えている．

第２章では岩石から風化あるいは熱水作用その他で生じた粘土について，それらを素材とする土器・陶磁器などの全国産地別における鉱物的見方などが記されている．

第１章では古くは縄文時代の石器に利用された石にふれ，ついでは古墳に注目しその構成について特に石室・石郭・石棺等に使われた石材の種類・産地等について岩石学的考察をもとにして精しく全国的に記述されている．

私達が往々古墳等を訪れた場合，「この石はどこから運ばれてきたのか，また何という種類の石なのか」ということを想起しがちである．本書ではこうした疑問に答え，内容も東北から九州までに及ぶ広域にある古墳についてそれらの形成時期・特徴などに言及しつつ石の種類・石質・産地等について実に精しく記述されている．例えば墳丘の上の敷石などが近い場所には見当たらない例などどこから運搬されえきたものか，その謎を解くカギは地質学からの考察のなかにあるという例を示している．石の岩石学的考察，例えば飛鳥の川原寺遺跡の礎石には珪灰石を含む変成岩があり，それは遠く大津市石山寺付近のものであるなどの考察は史的構想の展開に役立つ例であろう．また古墳の立地条件なども地質学的視野から解説されているなどのことも，そこを訪れる者にとってはよきアドバイスともなる．

石は従来庭園においては主な見所となっている．私達は往々にしてそれを美的鑑賞の域に止めてしまう．本書では京都をはじめ各地の著名な庭園についてそこに配置されている石の岩石学的な質を明らかにして，それらの産地．運び込まれた経緯などの歴史的考察を加えて記述されている．例えば竜安寺石庭の穴あき岩は海浜の穿孔貝によってできたもので，作庭上海を想起させ，また鎌倉時代の池泉回遊式庭園における石の配列はその時代の文化の意識を示すなど石の役割は大きい．

城といえば石垣，私達は現在多くのところで再現された城の姿を見ることができるが，しかし築城当時から残されているものといえばほとんど石垣であろう．この事から最近考古学の分野でも石垣についての関心が高まってきている．石垣に刻まれた印，石積の形式等の他にその石質が築城の歴史を物語ることがある．本書ではそれらの石の供給地・石質等がわかりやすく表示されており，私達は城を訪れる前にこのような表を一見しておきたいものである．

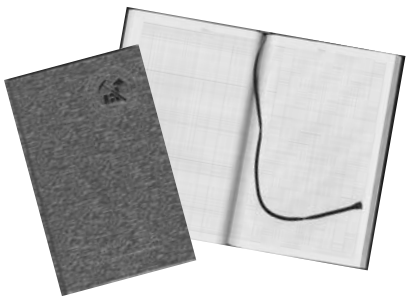
第２章では各地の代表的な陶磁器産地があげられ，ついで陶磁器づくりの手順と技，素地土の粘土鉱物成分，原料粘土の産地等が紹介されている．これらは著者の専門分野である．最後には著者と関係の深い東北地方と新潟の陶磁器も紹介されている．

国内の遺跡とくに古墳については，個別の情報は非常に多く考古学以外の分野の者にとってはなかなかそれらの総括的な様相の把握はむずかしい．著者の精力的かつ系統的にこれらを総括されたその努力には敬意を表したい．本書は遺跡における岩石に関心のある者，専門分野以外の者，歴史に関与している者にとってはよき手引書であり参考書である．

石は時代を超えたテーマであり，その時代の文化を示す指標の一つともなる．

（徳永重元）

学会オリジナルフィールドノート
好評発売中！！



サイズ：12×19cm．ハードカバー，ビニールレザー加工，金箔押し．
カラー：チョコレートブラウン．
　用紙は野外調査に最適な，雨に濡れても丈夫な高級紙・レインガードを使用しています．是非ご活用下さい．
ご購入を希望の方は，学会事務局まで．　会員頒価　500円／冊．

学協会・研究会報告

ILP Conference “New Frontiers in Integrated Solid Earth Sciences” 報告

金尾政紀（国立極地研究所）
在田一則（北海道大学総合博物館）

写真中央の黒背広はCloetingh会長，右端の白背広はNegendank事務局長．

はじめに

2007年６月12日－13日に，国際リソスフェア計画（ILP：International Lithosphere Program）主催の標記会議“統合固体地球科学におけるニューフロンティア”が，ドイツ・ポツダムの地球科学研究センター（GFZ Potsdam：GeoForschungsZentrum Potsdam）で開催された．金尾は日本学術会議ILP小委員会委員として日本学術会議から派遣された．以下に，会議の概要と現在のILP活動状況を報告する．

ILPは，とくに大陸とその周辺におけるリソスフェアの性質，ダイナミクス，起源および進化を国際的・学際的に解明することを目的として設立された．海洋地域での調査・研究によりプレートテクトニクスが確立したあと，大陸地域でのリソスフェアの動態と進化を研究すべきであるという地質科学界（IUGS：国際地質科学連合）と地球物理学界（IUGG：国際測地学・地球物理学連合）の要請により，1980年国際科学会議（ICSU：International Council for Science）総会で認められ，ILPは発足した．したがって，ILPはICSUにあるリソスフェア科学委員会（SCL：Scientific Committee on the Lithosphere）のもとにあって，IUGSとIUGGの支援を受けている．

我が国では，ILPは当初国際リソスフェア探査開発計画（DELP：Dynamics and Evolution of Lithosphere Project）として，1985年－1989年度に文部省特別事業として実施された．その後はILPとしての組織的プロジェクトは実施されていないが，日本学術会議が窓口となっている国際学術協力事業として位置づけられ，2005年の学術会議の改組以降は，地球惑星科学委員会にある国際対応分科会のILP小委員会が対応している．現在，小委員会は池田隆司（北大，世話役）・在田一則（北大）・平島崇男（京大）・岩崎貴哉（東大）・金尾政紀（極地研）・佐竹健治（産総研）・佐藤比呂志（東大）・平朝彦（海洋研究開発機構）の８名のメンバーで構成されている．

ILPのプロジェクトはテーマ別（Theme I: The Geoscience of Global Change, II: Contemporary Dynamics and Deep Processes, III: Continental Lithosphere, IV: Oceanic Lithosphere）と調整委員会（Coordinating committees，以下CC）別に実施されており（詳細はILPホームページ（http://www.sclilp.org/）を参照）．我が国の研究者もプロジェクトの委員長あるいは委員として参画している．

ILPは地質科学界（IUGS）と地球物理学界（IUGG）に対して学際的研究の促進の責任を負っているとともに，「社会のニーズへの対応」（自然災害の予知・軽減への理解や資源探査・環境保全の促進に必要な情報の提供）と「科学的好奇心の満足」との適切なバランスを保つことを指向している．

ILP会長は2004年にそれまでの平朝彦氏から現会長のS.Cloetingh教授（Vrije大学，オランダ）に交代し，事務局も米国地質調査所（デンバー）からGFZ Potsdam（事務局長は同センターのJ.Negendank教授）に移った．新会長のもとで，ILPの活動は上記の４テーマに纏められ，統合された固体地球科学，Geology/Geophysics/Geotechnologyの連携による地球深部・表層の結合，および固体地球と非固体地球の融合を目指している，また，若い世代の教育や開発途上国の教育も重視している．

今回のILP会議は，新生ILPの各プロジェクトの成果の総括と今後の展望を明確にすることを目的としていた．

経過と主な議題

会場のGFZ-Potsdamは，ドイツの固体地球科学研究の重要拠点である．ここでは世界で最初に地震計が作られ，また世界重力基準点がある．

初日は，標記の会議が開催された（16カ国，45名参加）．冒頭Cloetingh会長から，最近のILP活動と近未来の展望について紹介があり，2007－2009年の国際惑星地球年（IYPE）への取組み等が述べられた．その後，現在進行中の主要なタスクフォース（Task Force，以下TF）や調整委員会（CC）の学術的成果の紹介が続いた（20件）．

現在活動中のTFは13件あり，以下の課題の報告があった．TF I（地球の付加システム），TF II（火山体崩壊のテクトニックな原因と予知），TF III（リソスフェアとアセノスフェアの相互作用），TF IV（大陸地殻超深度沈み込み），TF V（古地震のパラメーター-断層のスケーリングと将来の地震災害），TF VI（堆積盆地），TF VII（応力・歪みの時空変遷），TF VIII（中部ヨーロッパの小規模プルーム）．

CCについては，現在のILP活動の旗艦ともいうべき国際大陸深部掘削計画ICDP（CC-4：Continental Drilling）の概要・成果・予定について詳細な紹介があった．実施済みのICDPは計20件，継続中は５件である．これまでに，バイカル湖などの陸湖，隕石の衝突構造，超高圧変成帯，火山・地熱地帯（雲仙など），活断層（台湾・淡路島など），資源探査，先カンブリアクラトンなど多数の掘削が行われた．今後は，北アナトリア断層やスバールバール諸島，台湾東方沖，南海トラフなどでも計画されている．最近重点的に行われているCCの一つとして，TOPO-Europe（CC-1/3）がある．これはヨーロッパの地形発達・隆起沈降・海面上昇など第四紀の地形変遷過程を４次元的にシミュレートする試みで，様々な物理化学的手法を駆使し，地表からマントルまでを統合した地球科学諸現象のモデル化を目指す．例えば，ヨーロッパ直下の小規模マントルプルームと地殻変動・地震活動の関係が指摘された．

新しいTFとして，北欧での氷床変動による地殻のアイソスタシー変化と第四紀の気候変動との関係を主テーマとするDynaQlim（Upper Mantle Dynamics and Quaternary Climate in Cratonic Areas）計画や中国科学アカデミーを中心としたTOPO-Central Asia計画が提案された．

日本からも，韓半島・沿海州・極東域を含めたジオトラバース計画（CC）の企画・申請が望まれる．そのためにも，韓国・中国・ロシアなど関係諸国との連絡・調整が必要である．

金尾は，国立極地研究所のSEAL計画(Structure and Evolution of East Antarctic Lithosphere)によるCC-8A（Lithospheric Evolution of Gondwana East from Interdisciplinary Deep Surveys：LEGEND）関連の発表を行った．この研究は，ILPのCC-8（グローバル深部構造探査のための国際協力推進委員会：COILS），IGCPの国際ゴンドワナ研究連合（IAGR），および南極科学委員会（SCAR）等からも支援されている．

初日の最後には，今後の学際的研究推進の方向として，宇宙測地・高圧実験・レオロジー・数値シミュレーション等のテーマに関する基調報告があった．また，会場ではポスター発表も同時に行われた（10件）．

二日目は，各TF責任者と事務局を中心に

20名程度が参加し，ILPの活動・出版計画・将来展望などに関する実務的会合を行った．具体的には，ナショナルレポートや本会議のプロシ―ディングスの作成，IYPEでのアウトリーチ活動，国際地質学会議（IGC：2008年８月オスロ）の準備報告，新規プロジェクトの紹介（２件）などである．また，若手研究者の優れた研究業績に対する表彰制度を設けることが提案された．TFへの配当予算は限られており，事務局から外部資金の積極的な獲得が促された．

おわりに

今回はILPが独自に企画した最初の会議であり，来年度以降も継続される（2008年秋は米国サンディエゴの予定）．参加国はヨーロッパが多く，アジアからは日本・フィリピン・台湾のみであった．今後もアジア各国への働きかけが必要である．

我が国におけるILPの活動は，上記のように1980年代後半から1990年代前半にかけてはDELP等活発であったが，最近は低調であると言わざるを得ない．個々の研究者はそれぞれの分野でプロジェクトに参加しているが，組織的な活動としては，19th Himalaya-Karakoram-Tibet Workshop（2004年，ニセコ町，CC1/1関連），12th International Symposium on Deep Seismic Profiling of the Continents and their Margins：Seismix（2006年，葉山町，CC-8A 関連），International workshop on accretionary orogens and continental growth-from the perspective of global mass circulation（2006年，高知市，TF I関連）などがある．今後，我が国からの積極的なプロジェクトへの参加・企画が期待されている．

ILPに関するお問い合わせは，ILP小委員会委員長の池田隆司教授（ikeryu@mail.sci.hokudai.ac.jp）までお寄せください．またILPホームページはhttp://www.sclilp.org/をご参照ください．

国立公園地質リーフレット　1．箱根火山　が発行されました！！

Ｂ２版．５万分の１地質図と解説からなります．箱根火山の研究史から最新の研究成果までフルカラーで詳しく紹介されています．

紙は，水に強く，鉛筆等での書き込みも容易なレインガード紙を使用していますので野外での調査・巡検に最適です．広くご活用下さい！

学会では今後各地の国立公園をターゲットに，地質リーフレットを製作していく予定です．子供版「箱根火山たんけんマップ」ともども，皆様のご意見・ご要望をお待ちしております．

購入希望の場合は，氏名・送付先・電話番号・購入冊数を明記の上，メールもしくはFAXで学会事務局までお申し込み下さい．会社名等での請求書が必要な方はその旨明記して下さい．

e-mail：main@geosociety.jp　FAX 03-5823-1156

※学会で販売するほか，神奈川県立生命の星地球博物館や箱根周辺の土産物ショップなどでも販売しています．

会員頒価　1000円/部
（20部以上の場合は割引あり）

国立公園地質リーフレットたんけんシリーズ1

「箱根火山たんけんマップ　一今，生きている火山」

新シリーズ登場！

A2版両面フルカラー印刷．
ハンディタイプで野外での観察に最適です．
教材としてもぜひご活用下さい．

小・中学生向け地質リーフレット新登場．
さあ！フィールドたんけんに出かけよう。

購入希望の方は、学会事務局まで．<main@geosociety.jp>　電話03-5823-1150

会員頒価　300円

Islands Arcは，年４回発行されます．最新号のVol. 16 Issue 3が2007年９月に発行されます．日本語要旨をニュース誌と学会ホームページ（http://www.geosociety.jp）にも掲載しています．全文はオンライン（http://www.blackwell-synergy.com）で無料閲覧できますので，是非ご覧下さい．

（Island Arc連絡調整委員会）

Vol. 16 Issue 3（September）日本語要旨

特集：Geology and geophysics of the Philippine Sea and adjacent areas in the Pacific Ocean

小原泰彦，徳山英一，Robert J. Stern

1. Variation of crustal thickness in the Philippine Sea deduced from three dimensional gravity modeling

Takemi Ishihara and Keita Koda

３次元重力モデルから得られたフィリピン海の地殻の厚さの変化

石原丈実，神田慶太

フィリピン海中北部の地殻の厚さを重力データから求めた．広域的な重力変化の補正としては九州-パラオ海嶺の両側でリソスフェアの厚さに15kmの差があることのみ考慮した．地殻の厚さが６kmで一定という仮定の下にマントルブーゲー異常を計算し，地殻の厚さを３次元重力インバージョン法により求めた．四国海盆の南部と西端部では地殻が５km程度と薄く，パレスベラ海盆の北西部と北東部では地殻が厚いという結果が得られた．この地殻の厚さの変化は四国・パレスベラ両海盆の海底拡大時のマグマ供給の変化によっており，一方後者は拡大速度の変化や過去の火山フロント近くでの活発な火成活動との関係がありそうだ．この結果では，九州-パラオ海嶺北部や大東海嶺域の海嶺部分で15kmを越す厚い地殻，西フィリピン海盆東北部や北大東海盆で５kmより薄い地殻の存在も示唆している．

Key words : crustal thickness, gravity, Kyushu-Palau Ridge, mantle Bouguer anomaly, Parece Vela Basin, Philippine Sea, Shikoku Basin, three-dimensional modeling, West Philippine Basin.

2. Fault configuration produced by initial arc rifting in the Parece Vela Basin as deduced from seismic reflection data

Mikiya Yamashita, Tetsuro Tsuru, Narumi Takahashi, Kaoru Takizawa, Yoshiyuki Kaneda, Kantaro Fujioka, Keita Koda

反射法地震探査データから得られたパレスベラ海盆の初期リフティングに伴う断層分布

山下幹也，鶴　哲郎，高橋成実，瀧澤　薫，金田義行，藤岡換太郎，神田慶太

パレスベラ海盆は伊豆小笠原島弧と九州パラオ海嶺によって挟まれたフィリピン海プレートにおける背弧海盆の一つである．過去の背弧海盆の拡大やリフティングの痕跡を明らかにするためには詳細な地殻構造を明らかにすることが重要であるため，海洋研究開発機構および石油天然ガス・金属鉱物資源機構によって取得されたマルチチャンネル反射法地震探査データに対して重合前深度マイグレーション適用による高精度地殻構造イメージングを行った．得られた結果から500m以上の変位を持つ断層が見られ，伊豆小笠原側では火山活動に伴う堆積物によって一部を覆っているのが確認された．断層分布からパレスベラ海盆拡大時の初期リフティングは非対称であることが明らかになった．

Key words : back-arc basin, Izu-Ogasawara Arc, Kyushu-Palau Ridge, Parece Vela Basin, pre-stack depth migration.

3. Seismic study on oceanic core complexes in the Parece Vela backarc basin

Yasuhiko Ohara, Kyoko Okino and Junzo Kasahara

パレスベラ海盆の海洋コアコンプレックスの地震学的研究

小原泰彦，沖野郷子，笠原順三

本研究ではフィリピン海・パレスベラ海盆の海洋コアコンプレックスの地震学的構造を決定した．大西洋中央海嶺のアトランティスマシッフ海洋コアコンプレックスの統合国際深海掘削計画による掘削調査等の結果とも合わせ，本研究は海洋コアコンプレックスの内部構造の理解を大きく前進させるものである．パレスベラ海盆のカオス地形区を構成する海洋コアコンプレックスの一つで，マルチチャンネル反射法地震探査の時間マイグレーション記録上において，往復走時0.15秒に存在する連続性の良い，明瞭でスムーズな反射面が認められ，「D反射面」と名付けた．「D反射面」はアトランティスマシッフ海洋コアコンプレックスで報告されているものと類似している．一方，海底地震計を用いた広角地震波屈折法探査からカオス地形区の速度構造モデルを決定した．それによれば，カオス地形区の下では６km/s以上という速いP波速度の領域が存在しており，カオス地形区の海洋コアコンプレックスの核は主にハンレイ岩質であると考えられる．本研究とアトランティスマシッフの最近の研究とを合わせ考察すると，「D反射面」は海洋コアコンプレックス一般に見られるものであり，それはハンレイ岩体中に生じたローカルな断裂帯に沿った変質フロントを現していると考えられる．カオス地形区では海洋コアコンプレックスを形成させるに至ったデタッチメント断層の活動が3回生じたと考えられる．最初と2回目のデタッチメント断層の活動では，表層の玄武岩層と深部のハンレイ岩質の核が露出したが，最後のデタッチメント断層の活動では，表層の玄武岩層のみが露出した．

Key words : Atlantis Massif, detachment, D-reflector, gabbroic core, multichannel seismic profiling, oceanic core complex, Parece Vela Basin, P-wave velocity structure.

4. Oceanic Crust and Moho of the Pacific Plate in the Eastern Ogasawara Plateau Region

Takeshi Tsuji, Yasuyuki Nakamura, Hidekazu Tokuyama, Millard F Coffin and Keita Koda

東部小笠原海台周辺の海洋地殻とモホ面

辻　健，中村恭之，徳山英一，Millard F Coffin，神田慶太

小笠原海台周辺の海洋地殻とモホ面の構造を解明するために，反

射法地震探査データに対して瞬間位相を用いた速度解析を行い，海洋地殻内の音波速度構造を推定した．そして推定された速度構造を用いて深度断面図を作成した．海台の南側では，海洋地殻内の構造とモホ面を明瞭な反射面として同定でき，モホ面が海台に近づくにつれて深くなることが明らかとなった．一方，海台の北側では，海洋地殻とモホ面が音響的に不明瞭であり，海底は起伏に富んでいる．この海台北側の不連続的なモホ面は，火成活動に伴う起伏の激しい地質境界を表しているか，厚いモホ遷移帯を表していると考えられる．小笠原海台の北側に位置する鹿島断裂帯においても海洋地殻とモホ面の音響特性が変化しており，海台と断裂帯に囲まれた海域で火成活動が活発であることが示唆された．

Key words : magmatic activities, Moho, oceanic crust, Ogasawara Plateau, seismic attributes, seismic velocity.

5. Cenozoic stratigraphy and sedimentation history of the northern Philippine Sea based on multichannel seismic reflection data

Yu Higuchi, Yutaka Yanagimoto, Kazuyoshi Hoshi, Sadao Unou, Fumio Akiba, Kunishige Tonoike and Keita Koda

反射法地震探査記録に基づく北部フィリピン海盆の層序と堆積史

樋口　雄，柳本　裕，星　一良，宇納貞男，秋葉文雄，外池邦臣，神田慶太

平成10年度から実施された「大水深域における石油地質等の探査技術等基礎調査」の一環として，北部フィリピン海において収録された累計26,825.2kmに達するMCS反射法地震探査記録の解釈結果および既往の海洋掘削孔データの対比に基づき，これらの海域の層序区分および岩相区分を行った．この海域には始新統から鮮新･更新統に至る各層準相当層が分布することが明らかになった．その層厚は大半の海域で500m±であるが，奄美三角，小笠原舟状両海盆では2,000m以上に達している．

海嶺を構成する基盤岩と堆積層との間には，１．堆積層が基盤にオンラップする　２．両者が断層により接する　３．海嶺火山岩の一部と堆積層が指交関係を呈する，という三種の層位関係が認められ，これらの確認は基盤岩，堆積層それぞれの年代の検証，およびテクトニクスを知る上で大きな手がかりとなる．

各海盆ごとに堆積層の分布形態，層厚，基盤との層位関係は，それぞれ固有の特性を呈する．南および北大東海盆の間には始新統の岩相，層位関係に大きな差異が見られ，それぞれの起源を異にすると考えられる．また南大東海盆の一部では，当海域で最も古い下部始新統が大東海嶺などの一部と指交関係を呈し，同時期における局地的火山活動の存在を示唆している．

九州パラオ海嶺の西側各海盆の東縁部には主に漸新統からなる厚い堆積エプロンが発達し，同海嶺の活動を記録している．また古伊豆小笠原弧のリフティングにより拡大したとされる四国・パレセベラ海盆には主に中新統以新の半遠洋性堆積物を主体とする堆積物が北に向かって層厚を増す形で分布している．

小笠原弧周辺は小笠原舟状海盆に発達する古伊豆小笠原弧の活動の痕跡と考えられる厚い漸新統を除いては大量の鮮新世以降の火砕性堆積層が分布し，これらは現在に至る同弧の活発な火山活動から由来したものである．

各海域の層準別層厚分布を概観すると，大局的に堆積の中心は時代とともに西から東に向かって移動し，島弧活動，海盆拡大を繰り返したフィリピン海の島弧海溝系の形成プロセスを反映していると考えられる．

Key words : acoustic basement, Cenozoic, Daito Ridge and basin region, Philippine Sea, pre-stack depth migration, sediment distribution, sedimentation history, seismic stratigraphy, Shikoku Basin.

6. Carbonate deposits on submerged seamounts in the northwestern Pacific Ocean

Hideko Takayanagi, Yasufumi Iryu, Tsutomu Yamada, Motoyoshi Oda, Kazuyuki Yamamoto, Tokiyuki Sato, Shun Chiyonobu, Akira Nishimura, Tsutomu Nakazawa and Satoshi Shiokawa

北西太平洋の沈水海山上の炭酸塩堆積物

高柳栄子，井龍康文，山田　努，尾田太良，山本和幸，佐藤時幸，千代延　俊，西村　昭，中澤　努，塩川　智

北西太平洋に分布する海山（６海域16海山19地点）で掘削されたコア試料の浅海性炭酸塩岩の岩相ならびに堆積年代を検討した．その結果，本海域の海山上の浅海性炭酸塩岩は，必ずしも温暖期のみではなく，寒冷期にも多く堆積していることが明らかとなった．また，浅海性炭酸塩岩とそれらの基盤岩の年代には，大きな差異がないことが明確になった．以上の結果は，本海域の海山上の浅海性炭酸塩岩の形成・発達は，汎世界的な気候変動よりも，地域的な造構運動・火成活動に強く規制されていることを示している．また，浅海性炭酸塩岩を構成する生物の組成には時代変遷が認められ，その変遷は，従来の研究で指摘されてきたように，海水成分の変化を反映しているものと類推される．

Key words : Cenozoic, Late Cretaceous, limestone, northwestern Pacific Ocean, seamount, shallow-water carbonate.

7. Growth History and Formation Environments of Ferromanganese Deposits on the Philippine Sea Plate, Northwest Pacific Ocean

Akira Usui, Ian J. Graham, Robert, G. Ditchburn, Albert Zondervan, Hiroshi Shibasaki, and Hajime Hishida

北西太平洋フィリピン海プレート域の産する鉄・マンガン酸化物の形成史と形成環境

臼井　朗，Ian J. Graham，Robert. G. Ditchburn，Albert Zondervan，柴崎洋志，菱田　元

北西太平洋はプレート収束域に位置する活発な変動帯である．ここには堆積起源の鉄・マンガン酸化物が予想外に広く且つ広い水深帯に分布するらしい．地質環境の異なる６地域のマンガンクラストについてベリリウム同位体分析を行ってmmスケールの成長年代を測定した結果，古いものは1500万年（中期中新世）にさかのぼりそれらの平均成長速度は４～７mm／百万年である．成長過程で基盤の崩壊・変形などによる局地的な速度変化・中断があるものの，全海域で現在もマンガンクラストの連続成長が続いている．これらは海洋環境を記録する堆積岩と見なせると同時に，資源評価の上からはクラスト・団塊の広範な分布が期待できる．

Key words : $^{10}Be/^{9}Be$ dating, ferromanganese crusts, growth

rates, hydrogenetic, mineral resources, Philippine Sea Plate.

通常論文

1. Ophiolites of the Eastern Peninsulas zone（Eastern Kamchatka）: Age, Composition, and geodynamic diversity

Nikolay V. Tsukanov, Wolfgang Kramer, Sergey G. Skolotnev, Marina V. Luchitskaya and Wofgang Seifert

カムチャッカ東部，東部半島帯のオフィオライト：年代，組成及び構造場の多様性

カムチャッカの東部半島帯の付加複合体に産する様々な年代と成因の欠員オフィオライト岩体群は，地質学的，地球化学的，鉱物学的データから３つのグループに区分できる：(i) 白亜系アプチアン～セノマニアン統のグループ：ソレアイト玄武岩，遠洋性堆積物，斑れい岩類よりなる過去の海洋地殻の破片で，１つの構造ユニット（アフリカ複合体），カムチャツキー岬半島のピケジュ複合体，そしてクロノツキー半島のメランジュ中に産する．(ii) 白亜系上部のグループ：非常に枯渇したかんらん岩，斑れい岩，斜長石花崗岩よりなり，島弧ソレアイト，無人岩，高アルミナソレアイト質玄武岩を伴う沈み込み帯域起源のもの．(iii) 暁新統～始新統のグループ：島弧内または背弧起源の斑れい岩，ドレライト（層状岩脈群），玄武岩で，海洋性ソレアイト質メルト及び背弧海盆玄武岩質ドレライトから形成された．これらの様々なオフィオライト岩体はクロノツカヤ海洋性火山弧の進化に関連した産物である．最初のオフィオライトグループは，アプチアン～セノマニアン統の古い海洋地殻の断片であり，その海洋地殻上にクロノツカヤ弧が形成された．次の沈み込み帯域型オフィオライトは，沈み込み帯上のウェッジマントルにおける度重なる部分溶融の結果形成された．これはカムチャツキー岬地域ではソレアイト玄武岩と無人岩を伴い，クロノツカヤ古島弧のクロノツキー地域では斜長石ソレアイトを伴う．そして，島弧玄武岩及び海嶺玄武岩の地球化学的性質を示すオフィオライトのグループが，クロノツカヤ火山弧の進化の最後の段階で引張拡大場において形成された．

Key words : Eastern Kamchatka, geochemistry, geodynamic settings, mineral compositions, ophiolites, paleoarc.

2. Quaternary tectonic rotation in central Japan: paleomagnetism of the Eboshidake volcanic rocks

Yasuto Itoh, Toshiyasu Miyazaki and Seiji Nishizaki

中部日本の第四紀回転運動：烏帽子岳火山岩類の古地磁気

伊藤康人，宮崎利靖，西崎聖史

プレート三重会合点に近い中部日本の第四紀地殻変動を，古地磁気データに基づいて評価した．段階熱消磁実験によって，横ずれ活断層の末端周辺に噴出した前期第四紀の烏帽子岳火山岩類の18地点から，特徴的残留磁化が分離された．地点平均方位の偏角は非常に大きなばらつきを示し，平均値は東偏している（Dm＝－161.7°）．伏角統計に基づいて算出した平均伏角（Im＝－48.9°，δI＝6.6°）は調査地域の緯度から期待される値と調和的である．試料は幅広い層準から得られており地磁気永年変化の影響は相殺されていると考えられるので，東偏は垂直軸周りの時計回り回転運動を表している．従来の古地磁気データと共に，今回の結果は，中部日本の時計回り回転域が，測地学的研究で見出されたNE-SW方向歪み帯と重なることを示している．烏帽子岳火山岩類の古地磁気偏角が示す東偏量とそのばらつきは，最近の歪み速度を外挿した数値よりはるかに大きく，活断層末端部の複雑な運動や地温勾配の高い第四紀火山地帯周辺で回転運動が促進されることを反映している可能性がある．

Key words : central Japan, differential rotation, neotectonics, paleomagnetism, Quaternary

3. Cenomanian（Upper Cretaceous）carbon-isotope stratigraphy of terrestrial organic matter for the Yezo Group, Hokkaido, Japan

Go-ichiro Uramoto, Tomotaka Fujita, Akinori Takahashi, and Hiromichi Hirano

北海道蝦夷層群セノマニアン階の陸源性有機物の炭素同位体比層序

浦本豪一郎，藤田知孝，髙橋昭紀，平野弘道

北海道の小平地域と大夕張地域に分布する蝦夷層群上部白亜系セノマニアン階を対象に，陸上高等植物に由来する堆積性有機物の炭素同位体比層序を確立した．生層序を基に両地域の炭素同位体比曲線を比較すると，セノマニアン階を通して類似の変動パターンが認められたことから，得られた曲線はセノマニアン期の後背地における陸上高等植生の炭素同位体比組成の平均的な経時変動を反映している可能性が高い．また，蝦夷層群の炭素同位体比曲線を，生層序を基礎として欧州地域セノマニアン階の炭酸塩炭素同位体比曲線と比較したところ，セノマニアン階において，国際対比に有用な３つのピークが認められた．特に，本研究の対比では，中部セノマニアン階下部の炭素同位体比変動（MCE）の振幅（約＋１‰）が炭酸塩と陸源性有機物で同調することが明らかとなった．このことは，MCEにおける陸源性有機物の炭素同位体比変動が，当時の大気-海洋システムの炭素同位体比変動を正確に反映し，下部／中部セノマニアン亜階境界の指標になることを示すと考えられる．

Key words : carbon isotope stratigraphy, Cenomanian, correlation, Cretaceous, Hokkaido, Japan, terrestrial higher plants, Yezo Group.

4. Geologic age of the Yokawa Formation of the Kobe Group（Japan）suggested by terrestrial mammalian fossils

Takehisa Tsubamoto, Takashi Matsubara, Satoshi Tanaka and Haruo Saegusa

陸上哺乳類化石に基づく神戸層群吉川層の地質時代

鍔本武久，松原尚志，田中里志，三枝春生

神戸層群吉川層最下部からの二種類の陸上哺乳類の歯列化石を記載し，哺乳類化石に基づく吉川層の地質時代を議論する．記載する化石は，新種であるボトリオドン・サンダエンシス（アントラコテリウム科）とヒラキウス類似属（サイ上科）である．吉川層下部からは，以前に，ザイサンアミノドン属（アミノドン科）も発見されている．ボトリオドン・サンダエンシスの形態（進化段階）は中期始新世末期～後期始新世，ヒラキウス類似属のそれは前期～中期始新世を示唆し，ザイサンアミノドン属は中期始新世後期～後期始新世を示唆する．したがって，これらの化石は，作業仮説として，吉

川層下部が中部始新統最上部（約38Ma）に対比されることを示唆する．これらの哺乳類化石に基づく地質時代決定の解像度は比較的低いが，近年の放射年代測定による結果と調和的である．

Key words : Bothriodon, Eocene, geological age, Hyrachyus, Japan, Kobe Group, Mammalia.

5. Olivine-spinifex basalt from the Tamba belt, Southwest Japan: evidence for Fe- and HFSE-rich ultramafic volcanism in Permian Ocean

Yuji Ichiyama, Akira Ishiwatari, Kazuto Koizumi, Yoshito Ishida and Sumiaki Machi

丹波帯のかんらん石スピニフェックス玄武岩：ペルム紀海洋地域における鉄とHFSE（high field strength element）に富む超苦鉄質火成活動

市山祐司，石渡　明，小泉一人，石田義人，町　澄秋

福井県小浜地域の丹波帯において，かんらん石スピニフェックス組織を示す玄武岩が鉄ピクライトと共に転石として発見された．このスピニフェックス玄武岩は最大10cm程度のスピニフェックスかんらん石（仮像）とTiオージャイトの斑晶を持ち，マトリックスは完晶質である．化学組成ではHFSEに非常に富む特徴を持ち，微量元素パターンや微量元素比は鉄ピクライトに類似する．このことはスピニフェックス玄武岩と鉄ピクライトは同源マグマに由来することを示している．同様の岩石はコラ半島における原生代初期のペチェンガ緑色岩帯でも見られ，単一の溶岩あるいは岩床中で同一の鉄ピクライト質親マグマから分化したものであると考えられる．この親マグマはマントルプルーム内の鉄とHFSEに富むざくろ石パイロキシナイトが含水条件で溶融して形成されたのであろう．スピニフェックス玄武岩の発見はペルム紀海台でペチェンガ型の鉄に富む超苦鉄質火成活動が起きたことを意味する．

Key words : ferropicrite, garnet pyroxenite melting, komatiite, olivine-spinifex basalt, Permian mantle plume.

院生コーナー

東北大グループ，有機地球化学会へ行く ～日本有機地球化学会シンポジウム参加報告～

高橋　聡・福田良彦
東北大学大学院理学研究科

1．はじめに

2007年７月26日～27日，石川県金沢市金沢大学サテライトプラザを会場に，第25回日本有機地球化学会シンポジウムが開催された．この会は，日本有機地球化学会会員を中心に有機地球化学分野を研究する研究者・学生が集まり，研究報告および議論が取り交わされる会である．近年，東北大学では，海保邦夫教授，掛川武准教授，大庭雅寛助教の研究グループが，有機地球化学的な分析手法を用いて，多様な堆積物の分析を進めてきた．今年度，東北大学の研究グループから教官・学生総勢６名で本学会シンポジウムに参加したのでその様子を報告したい．

参加メンバー：
海保邦夫（教授）・大庭雅寛（助教）・配川正隆（修士２）・高橋聡（修士２）・片渕真利（修士１）・福田良彦（修士１）

2．学会参加報告

シンポジウム１日目は，午前９時から始まった．最初は少し前日の移動による疲れの見えるメンバーも，学会が始まってからは目の色が変わったようであった．注目度の高い石油根源岩の研究や，縄文土器の付着物の研究，我々の研究内容と類似する地質時代の古環境解析などの研究発表があり，様々な着眼点の研究やそのスタイル，専門家同士の議論・意見交換，どれも聞き逃せない内容ばかりで，私を含めた学生４人は，会場の最前列を独占して，発表に聞き入っていた．中でも，今回が初めての学会参加になる修士１年の学生が講演に質問をするなど，議論の場に積極的に参加しようとする様子はとても頼もしく感じた．

写真上．シンポジウムの発表の様子．写真下．懇親会会場にて．

昼休みにはポスターセッションが行われた．テトラエーテル類の最新の分析手法による海水温の復元など，最新の研究成果が紹介され，教官・学生共々熱心に見入っていた．ポスター発表には，学生の参加も多かった．学位論文の中間発表という形が多く，同じ世代の学生たちがどのような研究をしているのかを知ることができ，また，同世代の活躍の様子はとても良い励みになった．

午後の部には，いよいよ東北大グループの発表の順番がやってきた．私たちの発表は，地球生命史のそれぞれの時代を対象としたものであったので，時代の古い順にひとつのセッションを占める形で発表が組まれていた．はじめに配川君が，30億年前に光合成細菌が存在した可能性を示す発表を行い，筆者（福田）がペルム紀末の大絶滅事変の解析，次いで筆者（高橋）が三畳紀前期/中期境界の環境解析について，片渕君が白亜紀における海洋無酸素事変の様子の復元について発表し，最後に大庭先生が白亜紀のOAEについての報告を行った．学会発表経験のある，修士２年の学生が安定した発表ができたのに加え，初めての発表であった修士１年の学生が，落ち着いて発表をすることができ，さらにはその後の答弁にも対応できたのが大変良かった．また，このセッションを通じて，質問・コメ

兼六園にて，シンポジウムが終わり達成感に浸る学会参加メンバー．左より，高橋，配川，海保，片渕，大庭，福田．

ントが非常に多く寄せられ，各自今後の研究活動の参考になったと思う．

発表が終われば，もう気分は懇親会である．懇親会は，金沢市内を見渡す丘の上に立つ松魚亭という料亭でおこなわれた．美味しい海産物に舌鼓を打ちながら，他大学の先生方や，企業の方々とお話ができ，とても有意義な時間を過ごすことができた．二次会は，会場を市街地に移して，若手研究者の集まりに参加した．学生同士の研究生活の話や，精力的に活動をなさっている若手研究者のお話を聞けたのがよかった．「この先生の若いころはなぁ・・・・」などという話も飛び出し，笑いの絶えないお酒の席は，あっという間に過ぎてしまった．

シンポジウム２日目は，昨晩の余韻を少しも感じさせず（!?）に，午前の最終セッションに臨んだ．最後のセッションは，顕生代の地球環境イベントをテーマにした特別セッションが行われ，それぞれの環境イベントについてのレビューと最新の研究成果による知見が発表された．はじめに講演したのは，海保先生で，ペルム紀末の絶滅事変についての研究報告がなされた．データをまとめて様々な図を示し，まとめの図が示されたときには相次いでシャッター音が響き，その注目度が高いことが窺えた．その後，白亜紀の海洋無酸素事変や，白亜紀末の大絶滅の解析，第三紀の研究の講演がなされた．なかでもクロロフィル由来のポルフィリンの分析など，最新の分析手法を確立し，その応用例を示した発表には，まわりの関心が集まっていた．

学会の最後に，今後の有機地球化学分野の展望について総合討論がなされ，有機地球化学分野のそれぞれの研究者から意見が交わされた．中でも長谷川先生や石渡先生などの先生方がお話になった，地球化学を研究するにあたり，化学物質を見ていくことと同時に，岩石や層序をみること（地質学・岩石学）や，有機物を生産する現世生物の生態の把握すること（生物学）を合わせて考察していくこと，あるいはそのような分野の共同研究者と協力して理解を進めていくことの重要性を説いたお話が印象的だった．この話を聞いて，今回の私たちのような地学系からの参加者と化学系分野の研究者が一同に会し，議論を行ったことはとても意義深いことであると思った．

なんとか私たち学生の発表は同行した2名の先生方から合格点をいただけたようであった．ご褒美というわけでもないだろうが，学会終了後に東北大メンバー全員で兼六園を観光した．夏の日差しが照り付け，気温は暑かったが，緑の庭園を眺めながら学会終了のさわやかな達成感に浸った．

おわりに

仙台に無事に帰りついた学生陣の顔は実に生き生きしていた．学会初参加の修士１年生の学生が，「また学会に行きたい」と言っていたことは，大変喜ばしいことであり，先生方にとっても教え甲斐があったことだろう．それだけ今回のシンポジウム参加は有益なものであった．まず，これまでの研究活動をまとめることができ，それぞれの研究成果を自己で客観的に評価するとても良い機会となった．さらに，それを発表することで，様々な視点からのコメントが得られ，他者の研究発表から得られた様々なことは今後につながる改善点や課題を見出すことができた．これまで私たちは生物事変の実態を解明するため，ひとつのツールとして有機地球化学的解析を用いてきたが，有機物の起源や生成過程など，もっと化学的に細かな考察や確認が不足していたように思う．今回のシンポジウムで私たちの発表から生まれた議論やコメントは，化学の専門家ならではの指摘が多く，全体的な傾向を求めるだけでなく，もっと分析の精度にこだわることの重要性に気がついた．また，それぞれの研究者によって発表の構成や視点が異なり，発表をよりよく伝えるための工夫を学ぶことができた．

近年の研究事情は，共同研究や他分野との融合とういう傾向がある．今回のシンポジウムは，地質分野と化学分野の見解を共有し，それぞれの意見を交換し合う大変良い機会であったように感じる．このシンポジウムに参加して，私たちの知識や視野は大きく広がった．この経験から得たものを，今後の研究活動に存分に活かして生きたいと思う．

最後に，このたびの有機地球化学会シンポジウム参加にあたって，お世話になった先生方，学生の方々，並びにシンポジウムの企画・運営に尽力された，長谷川卓先生はじめ金沢大学の皆様に感謝する．

常時投稿をお待ちしています．院生コーナーの編集は現在以下の３名でおこなっています．原稿はe-mailでいただければ幸いです．

tksmcdr@hiroshima-u.ac.jp　高島千鶴（広島大）
iba@eps.s.u-tokyo.ac.jp　伊庭靖弘（東京大）
s059702@matsu.shimane-u.ac.jp　河野重範（島根大）

院生（研究生）の方へ「院生割引申請」について

2008年度（2008.4～2009.3）院生割引会費の受付開始

2001年より会費の院生割引制度が設けられています．定収のない院生（研究生）については，本人の申請により院生割引会費が適用されます．つきましては，次年度（2008年度）の会費について申請受付を開始致しますので，該当される会員は下記の書式にて申請書を提出して下さい（郵送）．**会費請求書発行の都合もありますので，請求書発行前の受付〆切は11月22日（木）と致します．特に口座自動引落で会費を納入されている方は，この期日までに申請書をご提出下さい．なお，これまで（～2007年度）の会費についての申請受付は終了していますので，2008年度分の申請のみ適用となります．**

注意！！
毎年更新となりますので，今年度の割引を受けている方で，次年度も該当する方は改めて申請して下さい（来年３月まで院生（研究生）の方も申請すれば適用）．

送付先：〒101-0032　東京都千代田区岩本町2-8-15　井桁ビル6階
日本地質学会

2008年度日本地質学会会費院生割引申請書

（新規・継続）

日本地質学会　御中

私は，運営細則第12条第1項（1）に基づき，会費の院生割引を申請いたします．

年　　月　　日現在

会員番号：

会員氏名：

所属：　　大学　　研究科

専攻　　前期・後期　　年在学中

上記，本学の学生につき，定収のない院生（研究生）であることを証明いたします．

指導教官（等）

所属：

氏名：　　印

請求書発行前受付〆切
2007年11月22日（木）

学　会　記　事

2007年度　第２回理事会議事録

2007年７月31日
日本地質学会　会長　木村　学

期　日：2007年７月14日（土）
12：00～17：00
場　所：地質学会事務局
出席者：木村会長，伊藤副会長，佃副会長，Wallis・上砂・狩野・公文・倉本・中山・久田・藤本・宮下・向山・矢島　各理事，橋辺（事務局）
欠席理事（委任状）：渡部常務理事・天野副常務理事・斎藤理事（行事委員会のため）
＊成立員数（12/17）に対し，出席者14名，委任状３名，欠席者０名で，理事会は成立．

◯報告

１．運営財政部会（部会長-上砂，中山，向山，倉本）
総務委員会（委員長-上砂）
・大学評価・学位授与機構から，国立大学教育研究評価委員会専門委員候補者の推薦依頼に対し，評議員会に推薦を依頼したが，推薦者が出なかった．したがって理事会が候補者として下記の方々を選出し，本人の承諾を得て，機構へ推薦した．
・達成状況評価委員　４名：井内美郎，北里　洋，大槻憲四郎，新妻信明
研究業績委員　５名：石渡　明，磯崎行雄，板谷徹丸，永広昌之，巽　好幸
・文科省より，平成20年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞および若手科学者賞
受賞者の推薦があり,会員にもHP，News誌で広報したが，期限までに推薦等はなかった．前回理事会で決めた，柵山賞（小沢賞）受賞者を推薦することとして，メール審議で検討の結果，今年度柵山賞受賞者の青矢会員の推薦を決め，推薦書類を提出した．
今後の候補者推薦も，若手会員に機会を広げることとして，応募の広報をおこなう．
・日本鉱物科学会（岩鉱，鉱物両学会の合併）の設立記念式典（９月22日，14：00から東大山上会館）へは会長が出席する．
・総会後の役員選任の挨拶状
無機マテリアル学会：新会長　木野村暢一，日本原子力学会：新会長　河原　暐　地盤工学会：会長　龍岡文夫：，三菱マテリアル㈱：社長　後藤貢，石油資源開発㈱：社長　棚橋祐治，日鉱ホールディングス＝ジャパンエナジー㈱：社長　松下功，（財）環境地質科学研究所：会長　中山輝也　理事長　佐藤成昭
＜他団体の賞の公募など＞
・朝日新聞文化財団「朝日賞」の公募，８月31日締め切り→News誌，HPに掲載
・沖縄協会「第29回沖縄研究奨励賞」の公募，９月30日締め切り→News誌，HPに掲載
・女性科学者に明るい未来をの会「猿橋賞」の公募，11月30日締め切り→News誌，HPに掲載
・東レ科学振興会「東レ科学技術賞」，「東レ科学技術研究助成」の公募，10月10日締め切り→News誌，HPに掲載
・発明協会「平成20年度全国発明表彰」の公募，９月７日締め切り→News誌，HPに掲載
・尾瀬保護財団「第11回尾瀬賞」の公募，10月31日締め切り→News誌，HPに掲
＜他団体の会合後援など＞
・計測自動制御学会「第33回リモートセンシングシンポジウム」，11月８-９日，協賛依頼　→　例年通り承諾
・産総研「第８回地質調査情報センターシンポジウム」，７月25日，後援依頼→承諾
・地震学会・火山学会共催「第８回地震火山子供サマースクール」８月4-5日，協賛依頼→承諾，資料配布として箱根火山探検マップおよび箱根火山地質図の無料提供要請も承諾．
・朝日新聞社「第５回ジャパン･サイエンス＆エンジニアリング･チャレンジ2007（JSE2007）」
平成19年６月－20年５月，後援依頼→例年通り承諾
会員関係（担当理事　中山）
１）入会の承認　正（12名）　阿部　進　亀田　純　金　幸隆　近藤玲介　境　智洋　酒井利彰　新村太郎　田村明弘　永井　潤　吉田麻美　渡部路子　佐野　貴司
２）院生割引（85名）青柳大介　池田昌之　石原幸子　市來孝志　岩村里美　江川佳苗　遠藤俊祐　大友隆史　大場裕史　大森康孝　大谷麻美　梶　海彦　勝根　郷勝部　亜矢　加藤暁之　加藤史恵　上條裕久　亀　聡実　北嶋亜以子　國光陽子　熊田祐子　小林今日子　駒田希充　齋藤華苗　阪上雅之　佐々木聡子　佐々木潤　佐藤伸明　椎根　大　志村崇　下郡裕之　菅沼香織　鈴木将治　鈴木隼人　清家一馬　高島紫野　高梨幸志郎　竹田知史　舘　良和　谷口圭輔　塚田　豊　鶴岡昴　寺下陽三　東郷徹宏　戸邉勇人　鳥口能誠　中澤理久　中島由記子　中村圭助　南部拓未　二宮知美　野々垣進　林圭一　原　勝宏　伴野卓磨　福田佳代　古橋恭子　真末裕志　水落裕之　溝口秀治　山口真喜子　山崎　亮　山田周作　山本修治　吉内佑佳　吉田昌幸　ラコトナンド　ラサナ　タラ　タカム　稲本雄介　尾崎かおり　馬淵しの　長谷川裕樹　島野恭史　酒井亮太　小城志保子　永田潤　星多恵子　馬場奈緒子　佐藤和也　井上朋香　ボーズ　サンカー　市川　博　ココニャンギ　ウィタネネ　ジョセフ　草野有紀　橋本瑛久
３）準（９名）　加川泰久　西垣貴史　忽滑谷優里　山崎雄三　湯川達也　横幕早季　小安浩理　森谷　匡　及川敦美
４）退会（正13）田中秀典　節田佑介　工藤高一　鈴木正義　塩野正道　佐治一郎　礒見　博　勝木厚成　狩俣　薫　塩見良三　佐藤　充　田島俊彦　三宅輝海
５）逝去（名１，正１）　大久保雅弘（６月10日）　立花　卓（2006年12月11日）
６）６月末日会員数
賛助34，名誉74，正4,331（うち院185），準29，合計4,468（昨年比－74）
７）50年顕彰会員の追加承認：これまでのリストから漏れていた方，秋山雅彦名誉会員（55年）と山形　理会員（50年）を追加承認し，９月に顕彰することとした．
８）会員名簿の発行準備中，印刷会社の選定，２社から見積もり提出．
９）留学生会員は将来国際交流の橋渡し的役割を担うことになる，とくにアジア地域からの学生に対するケアーを重視すべきということで，国際交流委員会に具体的な検討を要請した．
関連学会連合（担当理事-天野）
地球惑星科学連合（久田連絡委員）
・法人化を機軸に検討中．
・開催国（韓国）の都合により地学オリンピックの日程が早まり10月７日からとなった．オブザーバー参加者の人選も含めて改めて検討しなおすこととなった．
学術会議関係報告（木村会長＝連携会員）
・課題別委員会が活発になった，ポスドクのアンケートを行っているが，深刻な状況があきらかになりつつある．
会計関係（担当理事-向山）
・会員管理システム移行費用の支払いについては，予算上は半額を一括，半額をリースとしていたが，この支払い（基本ソフトおよび新システムへの移行・カスタマイズ）ではリースにするメリットがなく,全額一括払いとすることを検討し，承認された．
・国際賞の招待費用は，１名分の航空運賃および宿泊費として40万円を支出する．
・07年度支部補助費：総額（70万円）の６割を均等割（６万円）＋会員比率
北海道支部　73,900円，東北支部

78,900円，関東支部　171,100円，中部支部　109,000円，近畿支部　94,400円，四国支部　71,900円，西日本支部　100,800円

広報委員会（担当理事-倉本）

・行事委員会と検討し，札幌大会プレスリリーススケジュールを８月24日（金）に変更決定した．
・メルマガgeo-Flash第１号（7/3），臨時号（7/10）を配信．予定通り第２号を7/17に配信予定．
・MLリスト運用のためのシステム強化について
・記者発表マニュアルの制定
文科省の記者クラブに挨拶文，24日の札幌大会プレスリリースのこともアナウンスする．

ニュース誌編集小委員会（担当理事-倉本）

インターネット運営小委員会（委員長-坂口有人）

・Web上での入会申し込みを可能にする．申込書のフォーマットは紙送付とまったく同じ，紹介者は必須項目としない．ただし，院生会費の確認は，事務局から紹介者に対し確認を取る．

２．学術研究部会（部会長-公文,）

行事委員会（斎藤委員長）

・７月７日行事委員会を開催し，プログラム編成を中心に札幌大会について検討審議した．
・札幌大会の最終発表申し込み数は，シンポジウム（13題）：116件，一般発表：491件
（口頭　418件，ポスター　239件），合計657件
・受賞者記念講演は，学会賞の磯崎氏，国際賞のGreen氏，記念スピーチは青矢氏で行う．
時間としては，授与式を含めて６時までに完了．
・大会ポスター，公開講演会チラシなどの作成
・札幌大会見学旅行案内者（保柳会員ら），夕張市教育委員会の要請を受けて，９月12日に夕張市において会長講演を行う．これを年会関連行事とする．
・就職支援プログラムの内容を全地連との間で決定．北大キャリアセンターに後援申請，学内に対する広報の支援を受けることができる．
・同窓会について

国際交流委員会（公文-国際特任理事）

＊IYPEについて

・IYPEのオープニングセレモニーを08年２月パリで行う．学生対象のイベントに対し，日本からも５～６名の参加要請があるので，公募して選出する．
・学会独自の事業を行うことを検討．特別に企画せずとも，差しあたっては年会行事のうち適当と思われるシンポジウムに冠をつける，年会会場づくりにおいてもIYPEを宣伝するよう工夫する，プレスリリースでもIYPEを宣伝する．

３．編集出版部会（部会長-狩野，久田，宮下，Wallis）

地質学雑誌編集委員会（委員長-狩野　副委員長-久田，宮下＝企画担当）

・今月の編集状況は以下の通りです（７月13日現在）．
113-7：特集号　紀伊半島　総説１・論説７・口絵１（106p・校正中）
113-8：準備中
・2007年度投稿論文総数43編［論説27（和文27），総説７（和文７），短報８（和文７　欧文１），ノート１（和文１）］口絵５（和文３　欧文２））※うち30件（70%）が電子投稿
・投稿数昨年比　－13　　査読中43編
受理済み　８編

Island arc編集委員会（担当理事-Wallis，事務局長　竹内圭史・角替敏昭）

１．編集状況

2007年16巻の年間契約ページ数576（～最大620）p

１号Pictorial１編，特集６編，一般８編．210p．18年度では計画　540pに対し537p．

２号　一般７編．108p．６月発行済み．

３号フィリピン海特集７編，一般５編．６月27日入稿，９月下旬発行予定．170p見込

一般３編はOnline Earlyで公開中．

４号　手持ち原稿Pictorial１編，一般７編あり．

年間残り88pでは不足で，2008年から12p程度の前借りを検討中．

２．特集

フィリピン海特集：Guest Editors小原・徳山・Stern

全11編のうち７編を３号掲載．残り４編は後日一般として掲載する．

板谷特集：GE板谷・Sajeev・Wallis

６編受付済み，7-8編見込み．17-1号を予定．

久田特集：GE久田・Yumul（IGCP 516）

全24編受付済み．17-４号・18-１号分割掲載を予定．

HKT（ヒマラヤ）特集：GEWallis・Aitchison

07年５月集会の特集，全20編超．掲載は18-3号以降になる．

08年集会の特集の打診も来ている．

３．オンライン投稿

07年６ヶ月で新規投稿65編（特集10＋６＋24編，一般22編，口絵３編）．

一般に限っても原稿過多になってきており，需給調整策が必要．

・06年のインパクトファクターが下がった（1.2→0.76）が，掲載論文の内容等から来年は上がるとの予測がある．

企画出版委員会（担当理事-藤本）

・箱根リーフレットは，業者（タブチ・クリエイションズ）を通じて神奈川県博および箱根の６施設でリサーチ販売（委託）をすることとなった．会計と相談の上，販売価格は300円，委託価格（卸）は販売価格の５割とした．夏休み前に店頭に並ぶよう，とりあえず100部を送付した．
・今後のリーフレットなどの企画出版については，上高地を進める準備をする．
・地学読本刊行小委員会報告（原田憲一委員長）
９月の年会には，目次，表紙見本等を展示できるようにする．

４．普及教育事業部会（部会長-矢島，藤本）

・国際地学オリンピックへのオブザーバー参加教員１名を地質学会から選出するよう，連合地学オリンピック小委員会から要請があった．
地学教育委員会で検討のうえ，香東卓郎会員（独協埼玉中高等学校）を推薦することとした．ただし，開催日変更に伴い参加者側の変更も見込まれる．
・東北大学大槻会員より高校理科総合A，理科総合Bの開講状況についてアンケートした結果と，世界史未履修と同様の問題が起こっていることについて，地質学会として適切に対処するよう要望書が届いた．
この件に関しては，要望されていることはすでに周知のことであり，現状では，今問題化しても状況が良くなることはない．学会として，大きく取り上げる必要性を認めない．
・札幌大会の教育事業について，札幌市内の小中学校および札幌周辺の高等学校にポスターやお知らせのチラシを配布した．

地学教育委員会（委員長-阿部国広）

・地球惑星科学連合「教育問題検討委員会」7/7教育課程小委員会開催，矢島・藤本出席，藤本理事より報告があった．

５．その他

支部長連絡会議（担当理事-伊藤）

・６月23日に支部長会議を開催した．支部長は全員の参加を得た．
・大槻支部長より，2010年以降における支部回り持ちの年会開催の是非について検討依頼があった．12月評議員会で2010年以降の開催方式を決定する予定．

ジオパーク推進委員会（担当理事，佃委員長）

・正式な国内委員会が発足にあたり，地質学会から委員１名を出す．国際交流委員会で選出する．
・地質百選（GUPI，全地連）については，各地から大きな反響があったことが矢島

理事より報告され，学会員としても主体的な関わりを持ってほしいと期待された．

【以下，評議員会の下の委員会】
地質学史アーカイブス委員会（委員長　会田信行）
・委員会活動報告があった．

○審議事項
1．札幌大会準備（国際賞関連事業含む）など
プレスリリース等ではIYPE事業，ジオパークについても広報をおこなう．また，アジアとの積極的な交流も視野に入れて今後の大会運営をおこなう．秋田大会には,韓国からの招請を実現する．

2．各賞選考過程について
酒井前委員長から，審議の中間報告があった．委員会審議が長引くと次年度の選考に反映させることが難しくなる．現状での問題点を整理，把握して理事会としての具体案を作成することとし，担当は宮下理事とする．

3．アイランドアーク関係
1）編集委員長2名の交代申し入れ
発行にあわせて,2007年12月で退任とし，2008年１月から新委員長の就任とする．新委員長候補には，現委員長から打診していただくこととした．
2）雑誌総ページ数に比して投稿原稿が増加傾向にあり，論文の滞りを解消するため
論文は制限ページを20ページから15ページに，Reviewは無制限を20ページとする．超過した場合はページあたり15,000円とする．学会とBP社の間の契約ページを576ページから600ページに増やすことを編集委員会として提案する，ことを了承した
3）アイランドアーク出版元乗り換えの可能性について
編集長宛に他出版社から打診があり，可能性のひとつとして，また，契約更新の交渉手段とするためにも話を聞いてみる価値はある．12月の評議員会までにとりあえず相手の会社と情報交換し検討を進める．

4．その他
1）08年度役員選挙のための選挙管理委員
前年度の委員で継続可能な方　　加藤潔（早大），西村瑞恵（石油資源）
継続2名を除く新委員候補者３名を選出する必要がある．理事は各自心あたりを打診し,候補者の推薦をすることとした．
2）支部回り持ちの年会開催について
大槻東北支部長より，昨今の大学事情等では支部持ち回りの開催は非常に負担が大きい．持ち回りをやめて開催場所を固定化すべきとの提案と検討依頼があった．
固定化しても，何らかの会員相互の負担やボランティアは必要であり，イベント屋だけに任せられるわけではない.また，持ち回りをすることによる先端的学問への関わりや地域貢献，コミュニティの力を結集する機会ができるなど，負担もあるがそれなりのメリットがうまれる．支部負担の軽減方式などを提示の上12月の評議員会において，５地域持ち回り開催の継続を確認する．
3）07-2（9／8，札幌　北大）評議員会議題
①各賞選考について
②秋田大会について
③情報システムの今後
④その他
5．HPへの記事掲載について
社会的関心のある記事については，個人的見解が学会の見解であると誤解を招くことのないように配慮する．掲載記事は広報委員会などの複数チェックを経て掲載するようにする．

2007年度　第３回理事会（臨時）議事録

2007年８月28日
日本地質学会　会長　木村　学

期　日：2007年８月13日（月）
10：00～12：00
場　所：地質学会事務局
出席者：木村会長，伊藤副会長，佃副会長，渡部常務理事・天野副常務理事・Wallis・倉本・久田・藤本・向山　各理事，高木構造地質部会長・重松，小林構造地質部会事務局員
欠席理事（委任状）：上砂・狩野・公文・斎藤・中山・矢島・宮下
＊成立員数（12/17）に対し，出席者　10名，委任状７名，欠席者　０名で，理事会は成立．

○審議事項
1．活断層についての緊急夜間集会開催について
・緊急パネルディスカッションを構造地質研究部会とともに実施する事を最終確認した．
・内容の検討（プログラム原稿の検討）
1）表題：「我が国の防災立地に対する地球科学からの提言」
2）震源断層についての解説・議論・検証
震研（佐藤），産総研（佃が交渉），地理院（村上？佃が交渉）
3）被害状況の報告（中越沖地震）（小林）・（防災研：藤本が交渉）
4）パネルディスカッション（司会：高木；佃,伊藤＋京大防災研＋話題提供者）
・情報の使用状況現状
・調査の必要性
・モデルの検証
・従来の問題点と来年度以降の発展方向
・今後の準備の進め方について
21日のプレス発表資料投げ込みに合わせて，本件の原稿を用意する．それまでに，発表者等の依頼を行い，プログラムを確定する．
非会員等の発表者については，依頼講演（旅費負担）を想定する．

2．見学旅行実施に際しての「安全のしおり」および「車輌運転管理規程（暫定案）」について
・「しおり」および「暫定案」を承認した．なお，自家用車使用の際は，大会準備委員長を責任者とする．

3．沖縄奨励賞への推薦依頼について
・井龍氏（東北大）を会長推薦することとした．

4．法人化について
・８月６日に文科省の方針説明を受け，その報告が斉藤法人化委員長からあった．新法が出来ている現状では，旧法での法人化を進めることはできない．
平成20年12月から新法での法人登録を開始される．
・学会としては従来の方針を大きく変換する必要あり．９月評議員会で報告し，12月評議員会で対策を検討．

○報告事項
1．会員関係（担当理事　中山）
1）入会の承認　合計　７名
正会員（５）　土　宏之　渡邊正人　坂口　秀　長谷川智史　有道敏雄
準会員（２）　山口隆久　稲垣貴之

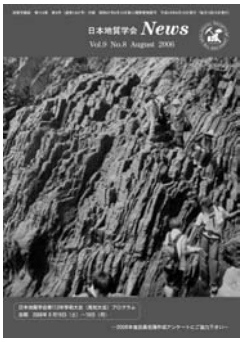
2．アイランドアークの出版社変更について
・出版社変更の可能性について情報収集先より問い合わせがあった．Island Arcという雑誌の名称の所有権については，別出版社に移行した場合に継続的に名称を使用できるかどうかという点で重要であるが，現在の契約には明記されていない模様．調整委員会等で確認することとした．

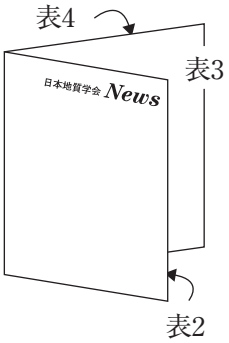
3．地学オリンピックについて
・地学以外の科目でのオリンピック実施が進められている中で，地学オリンピックの実施と日本からの参加については積極的に推し進めることを確認した．

広告募集

News誌に広告を掲載しませんか.

News誌の掲載広告を募集しています．学会の直接取り扱いになりますので，カラー印刷・掲載サイズなどご相談に応じます．ぜひご利用ください．





＜広告掲載価格表＞

	価格（モノクロ）	版下作成	カラー
表 4	60,000	＋10,000	＋10,000
表 2	50,000	＋10,000	－
表 3	40,000	＋10,000	－
普通	35,000	＋5,000	－

（単位：円）

申込・問い合わせ：日本地質学会事務局
電話　03-5823-1150　FAX　03-5823-1156
e-mail ; main@geosociety.jp

研究室のミニ工場

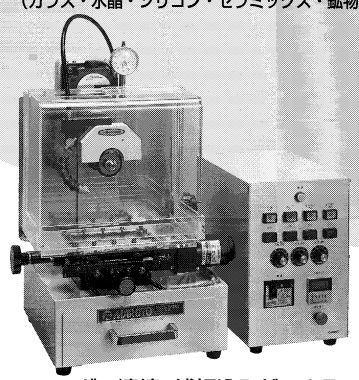
マルトーの
ラボ・ファクトリープラン3点セット

小型　精密　操作簡単　低価格

（ガラス・水晶・シリコン・セラミックス・鉱物・金属材料などの加工）

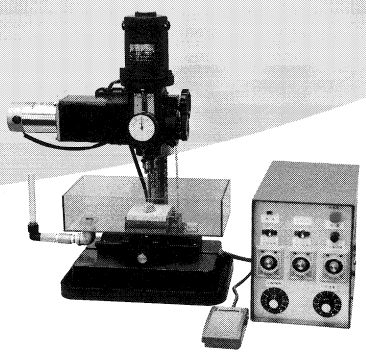
小さな機械だが役に立つ

磨く　切る　抜く



カッティング　連続・浅切込みができる
ステップカッター〔MC-170〕
●試料へのダメージが少ない
●最小切込み量 10μm／pass
●最大加工能力 H25×L40mm
●設置面積 W550×L450mm
●本体価格 178万円～

ポリッシング　精密鏡面研磨機
ドクターラップ〔ML-180〕
●組織検査用試料のラッピング・ポリシング
●アクセサリー豊富
●研磨試料サイズ φ1～φ100mm
●設置面積 W400×L400mm
●本体価格 45万円～



コアリング　微小径コア抜き取り機
ミニピッカー〔MG-5N〕
●主軸回転数 4000～12000r／min
●加工能力 φ1～φ6mm×30mm
●設置面積 W600×L400mm
●本体価格 125万円～

材料を切る・削る・磨くそして測る技術で奉仕する

http://www.maruto.com

株式会社マルトー
本社／〒113-0034 東京都文京区湯島1-1-10 ☎東京(03)3251-0727(代表) FAX:東京(03)3251-2478
福岡連絡事務所／〒815-0033 福岡市南区大橋1-21-5 岩田ビル ☎福岡(092)512-2755 FAX:福岡(092)561-4288

第34回

創立50周年記念

OYO展

『地球科学に関わる総合専門企業を目指して』

●とき　2007年10月16日(火)
17日(水)

●ところ　大手町サンケイプラザ
東京都千代田区大手町 1-7-2

就職関係者ならびに学生の方へ・・・・・・
今回の記念ＯＹＯ展は、当社や当業界を理解して頂ける絶好の機会です。
関係者のご来場をお待ちしております。

私たちには
地球の声が聞こえます。

イベントのご案内

■ 記念展示会

■ 記念セミナー

■ 特別講演

10月16日(火)

山根一眞氏　Kazuma Yamane
ジャーナリスト・ノンフィクション作家
「中越沖地震の現場で見た
日本の地質と課題」

10月17日(水)

竹村公太郎氏　Koutarou Takemura
財団法人リバーフロント整備センター 理事長
「湿地から生まれた日本文明
―水面下から水面下へ―」

入場無料　記念セミナーと特別講演は事前申込制

●お問い合せ先
応用地質株式会社　創立50周年記念OYO展事務局
TEL：03-3234-0811(代)　E-mail：prosight@oyonet.oyo.co.jp
担当：川地真人、坂爪康展

応用地質株式会社
URL http://www.oyo.co.jp/